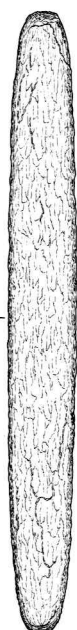


# 縄文・弥生移行期の石製呪術具 3

Stone Magical Objects During the Jomon-Yayoi Transition  
In Japan Vol.3

研究分担者 中村 豊 編 Edited by NAKAMURA Yutaka  
徳島大学大学開放実践センター Center for University Extension,  
University of Tokushima



2001. 2

考古学班  
研究代表者 春成秀爾(国立歴史民俗博物館)  
平成12年度文部省科学研究費補助金  
特定領域研究 A (1)  
研究課題番号 09208103  
日本人および日本文化の起源に関する学際的研究

Archaeological Section  
Head of Project: HARUNARI Hideji(National Historical Museum)  
Grant-in-Aid for Scientific Research on Areas(1)  
The Ministry of Education, Science, Sports and Culture of Japan  
Fiscal Year 1998, Project Number: 09208103  
Interdisciplinary Study on the Origins of Japanese People and Cultures



# 近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉 — 縄文から弥生 —

中村 豊

## はじめに

日本人の起源は、日本列島に展開した歴史上屈指の画期である縄文時代から弥生時代への変革をめぐりには語れない。戦後から最近まで、この縄文時代から弥生時代への変革は発展的に進歩する歴史の必然的な通過点であると考えられてきた。すなわち、狩猟採集にたよった縄文時代では平等で自給自足的な生活を営んでいた。しかし弥生時代になり農耕を導入すると余剰生産物が生まれ、社会的分業や階級が形成される。以上のような、いわゆる「唯物史観」に従った見方が一般的であり、出土資料に対しても、なかば法則的な解釈を与えてきたのである。

ところが最近の研究によると、縄文時代はすでに原始的な農耕をふくむ安定した生産性をほこり、広範囲にわたる交易、分業をおこなっていたことが明らかになりつつある。従来の学説がゆるぎつつあるいま、まさに縄文から弥生への変革をとらえなおす時期にきているといえるだろう。

それでは、このような現状にわれわれはいかにして対処すればよいのであろうか。唯物史観のように従来の研究手法では、既成の理論に資料を無理に当てはめようとして、実態にそぐわない歴史像を描こうとする傾向があったことは否めないのではあるまいか。しかも、時代背景に左右されやすい側面もあるように思えてならない。したがって、いつゆらぐともしれない理論を積極的に導入しようとするよりも、文物ひとつひとつを検証し、地域色や個性を活かした研究を進めていく方が、将来のためには生産的であると私は考えている。

今回の研究は、自分自身のフィールドを活かしながら、縄文から弥生への変革をとらえるのに適した文物を見極めて実証的に分析するという方法にしたがっておこなったものである<sup>1</sup>。

## I 「縄文から弥生」と石棒研究 — 近畿・瀬戸内地域の場合 —

以上のような動向のなかで、今回私がとりあげる文物は石棒である。なぜなら、石棒は土偶とともに縄文時代を代表する呪術具のひとつであって、弥生時代になるとまもなく消滅し、時代の変化をとらえるのに適しているからである。すなわち、縄文時代特有の儀礼が、どのようにして終焉していったのかという側面を明らかにできる可能性を持っているといえよう。

最近この石棒が、縄文から弥生にかけての近畿地方から瀬戸内地方に特徴的に分布することが明らかになりつつある。これが時代の移り変わりといかにかかわるのか、現状はこの研究課題を推し進める絶好の機会であるといえるだろう。

さらに、近畿・瀬戸内地方の縄文から弥生にかけて分布する石棒が、ほとんどすべて結晶片岩製であるという事実は、上記の研究を深めるの大いに役立つと考えられるのである。なぜなら、それは生産と流通が縄文と弥生とで具体的にどのように変化していったのか、また、どのように異なるのかという点をも解明しえる可能性を秘めているからである。これを進めるのに有効な方法は、縄文・弥生を通して流通し、しかもある程度産地を絞り込める文物に焦点をあてて、その

分布から生産・流通の変遷を明らかにするというものである。こうした研究に有効な素材は、時代背景を考慮に入れると、やはり石材であると思う。そこで、私は、勤務地である徳島という地域的特色を活かすために結晶片岩に着目した。結晶片岩は、広域にわたる変成作用によって生じた岩石であるから、黒曜石やサヌカイトほど、ピンポイントに産地を特定できない。しかしながら、中央構造線に南接する三波川帯とよばれる地域において産出し、近畿・東部瀬戸内地域内では、和歌山・徳島がこれに相当する(図11)ことから、ある程度の絞り込みは可能であろう。しかも、産地の外に多数持ち出されているのである。すなわち、産地をある程度限定でき、石器の素材としてすぐれ、比較的広域に流通する石材の一つとしてあげることができよう。

すでに、特定の石材を用いた石器の生産と流通に関する研究は、縄文・弥生両時代ともにさかんにおこなわれている。とくに、「縄文から弥生」を視野においたものとしては、近畿地方におけるサヌカイト製打製石器(石鏃や石錐)に関する研究をあげることができよう。山中一郎(1992)は、近畿地方における縄文晩期のサヌカイトがほとんど大阪・奈良県境の二上山産であるのに対して、弥生前期初頭に突如として香川・金山産のサヌカイトが増加すること、石鏃の製作技法が両面に大きな剝離面を残し周縁部の整形のみに細部調整を施す横断面が扁平六角形を呈する石鏃が出現することをうけて、これを弥生文化の東遷、すなわち西方からの遠賀川系集団の渡来・移住の結果であると主張したのである。さらに最近、秋山浩三(1999)も、河内平野における縄文晩期から弥生前期にかけてのサヌカイトの産地比率をグラフ化し、同様な考えを示している。このように、時代の転換点に石材の産地が変化するという点を指摘したことは卓見であったと評価しえよう。しかしながら、縄文時代からすでにあった打製石鏃という狩猟具の産地の変化をもって、すぐに人間集団の移動に結びつけるのはやや性急にすぎる解釈のように思えるのだ。以上のような研究成果を「多角的」に検証する上でもサヌカイト以外の石材、石鏃以外の石器についても検討を進める必要があるといえるだろう。

以上で述べたように、今回の研究では、縄文晩期後半から弥生前期初頭にかけて、近畿・東部瀬戸内地域に特徴的に分布する結晶片岩製石棒をとりあげ、当時の生産と流通の特色を探るとともに、この地域における「縄文から弥生」とのかかわりについて考察する。

## Ⅱ 石棒終焉に関する研究の歩み

### 1 戦後から近年までの研究史概略

石棒は、縄文中期に大型のものが成立し、後期以降小型化・精製化をとげ、やがて晩期にいたって石刀・石剣が分化したというのが、おおむね戦後から10数年前までの定説であったといえるだろう。たとえば、小林行雄(1959)は、中期に大型であった石棒が後期に小型化し、晩期に石刀が分化する。これを、宗教呪術的な意味を持った大型石棒から、所持者の集団内での地位を表す意味を持った小型石棒・石刀への変化としてとらえたのである。こうした見方は、当時としては的をえていた。その後日本列島全域の刀剣形石製品を集成した後藤信祐(1986)は、縄文中期に多くみられる粗製の大型石棒に対する長さ30～60cm程度で直径5cm前後の精製または半精製品を小型石棒とし、これと石刀・石剣を合わせて刀剣形石製品と定義した。そしてこれらが縄文時代の終末にいたるまで、地域ごとに次々と展開し、終焉を迎えたと論じたのである<sup>2</sup>。そして、

西日本においては、大阪市長原遺跡における、晩期最終末の石棒出土例を指摘しつつも「近畿地方にこの時期まで普遍的に刀剣形石製品が存在するかは疑問である。」と考えた。後藤の見方は、対象を「刀剣形石製品」のみに限定した場合、今日においてなお有効であって評価したい<sup>3</sup>。また、執筆当時の近畿地方における晩期末の石棒資料数からみると、この時期にまで石棒は残らないという判断は妥当であったといえるだろう。ただ、長原遺跡での出土例に接しながらも、晩期末の粗製大型石棒の再隆盛を見切れなかったのは、やはり先学の築いた枠組みの影響を無意識のうちを受けたからではあるまいか。この点が惜しまれるのである<sup>4</sup>。

いずれにせよ、石棒の小型化・精製化と階層性の芽生えとを結びつける見方は、このころまでは大きな影響力を持っていたといえるであろう。

ところが、ここ15年ほどで、近畿地方での縄文晩期末の調査例が飛躍的に増加した結果、後藤が集成した時点でわずかに長原遺跡での類例を数えるだけであった石棒も、着実に蓄積されていったのである。

この晩期末の石棒についてまず着目したのは、泉 拓良、大下 明と秋山浩三の3名であった。泉(1985)は近畿地方の縄文時代を概説するなかで、縄文時代の終末期に結晶片岩製の粗製大型石棒が主流となることを論じた。大下(1988)は、13点<sup>5</sup>の石棒が出土した伊丹市口酒井遺跡の報告書で、同様の石棒が晩期末の近畿地方に特徴的な遺物であることを指摘し、その後も(1995)同様の指摘をおこなっている。秋山も、大型石棒の出土した向日市南山遺跡の報告(1990)や、近畿地方における石刀の変遷を論じる(1991)なかで同様の指摘をおこなった。

以上3名によって明らかとなったのは、意外にも近畿地方の縄文晩期末、すなわち突帯文土器にともなう石棒は、晩期中葉以前の粘板岩やフォルンフェルスなどを素材とした精製の石刀・小型石棒とは異なり、結晶片岩を素材とする敲打仕上げの粗製大型石棒であるということであった。

## 2 最近の動向と課題

以上のような動向のなかで、転機となる2遺跡での発見があった。それは、神戸市大開遺跡と徳島市三谷遺跡である。

大開遺跡では、近畿地方でも最古の遠賀川式土器にともなう環濠集落が発掘されたが、そこから結晶片岩製の石棒12点が出土したのである(図15-3~5、前田・内藤ほか1993)。これによって、初期の遠賀川式土器の時期まで石棒が残ることが確実となった。

三谷遺跡では、多量の突帯文土器と少量の遠賀川式土器のセットに18点<sup>6</sup>にもおよぶ結晶片岩製の石棒が出土した(図13-5~10、図14、勝浦・木村1997)。結晶片岩の産出地である徳島で多量の石棒が出土したことによって、生産と流通という課題にとりくむことが可能となったのである<sup>7</sup>。

以上2遺跡での画期的な発見があったにもかかわらず、これらの石棒がどこで生産され、いかなる形で流通したのかということは明らかにされていないし、漠然と近畿地方に分布するということが指摘されているが、明確な分布図は示されていないのが現状である。また、結晶片岩製の粗製大型石棒という指摘はあっても、型式学的検討や大きさに関する具体的かつ詳細な言及はなかったのである。さらに、それぞれがどの土器型式に対応し、どのような時間幅におさまるの

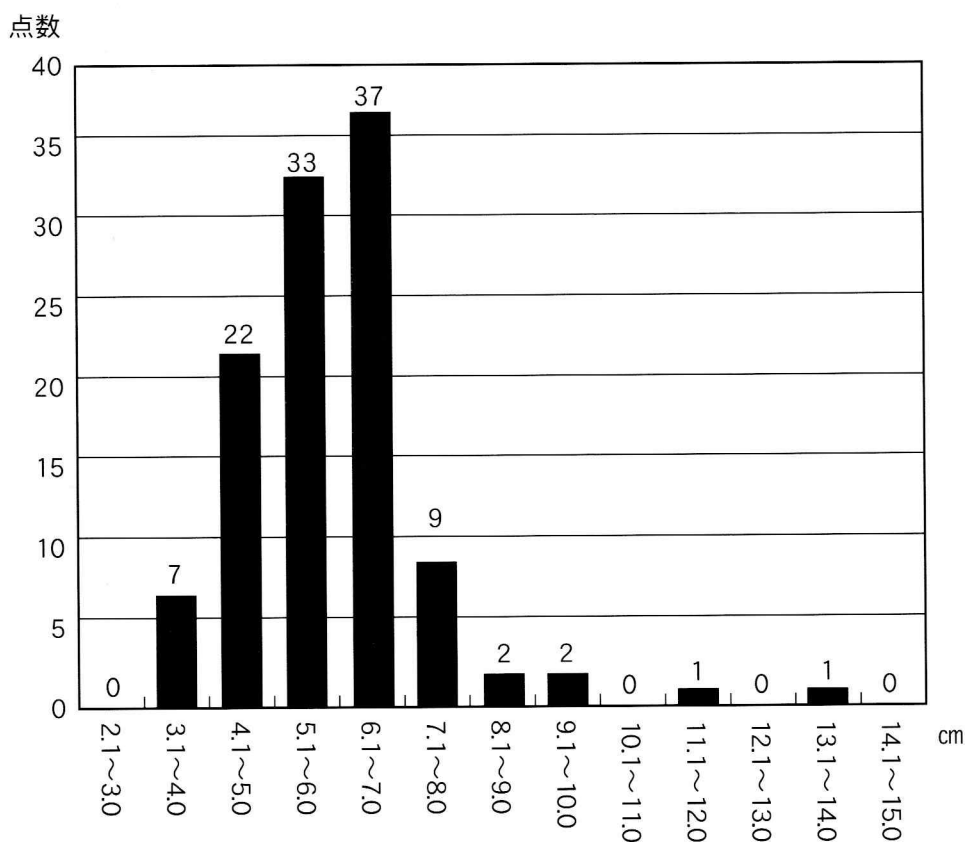


図1 結晶片岩製石棒断面径の分布

か、弥生前期のどのあたりまで残存するのか、という最も基本的な問題への取り組みも不十分である。ましてや、この地域における「縄文から弥生」とどのようにかわり、いかなる歴史的な背景のもとで使用されたのかという考察には至っていないのが現状であるといえるだろう。

私は特に以上に述べた点を重視し、予察的な論考をすでにいくつか発表してきた（中村 1998、2000a、2000d）。そこで、これらの石棒は大阪湾沿岸から徳島にかけての地域に分布の中心があり、盛行する時期は、突帯文土器でも後半の長原式から弥生前期初頭にかけてであることを指摘した。また、三谷遺跡で最も多量の石棒が出土し、その点数が他遺跡を大きく凌駕し、未製品は徳島でのみ出土していることから、生産地としての可能性を指摘してきたのである。

しかしながら、いくつかの課題があった。まず、個々の石棒の型式学的検討は十分ではなかった。本稿では、この点を特に意識して分析したつもりである。また、結晶片岩が三波川帯という中央構造線に南接して広域にわたって展開する変成岩である以上、生産地についての自説を補強する必要があった。そこで、三谷遺跡のすぐ南に位置する徳島市眉山において、結晶片岩の露頭の踏査、谷の転石の調査をおこなった。その成果は、巻末にカラー写真として示している（写真1～8）。さらに、資料集成を継続した結果多くの未公表資料を掘り起こすことができた。その成果として、文末に集成図を掲載した（図12～図18）。石棒の総数は46遺跡156点（表3、図11）となり、分布範囲は西は岡山・愛媛・高知、東は滋賀・奈良・和歌山と、従来の想定よりもすこし広がることとなったのである。

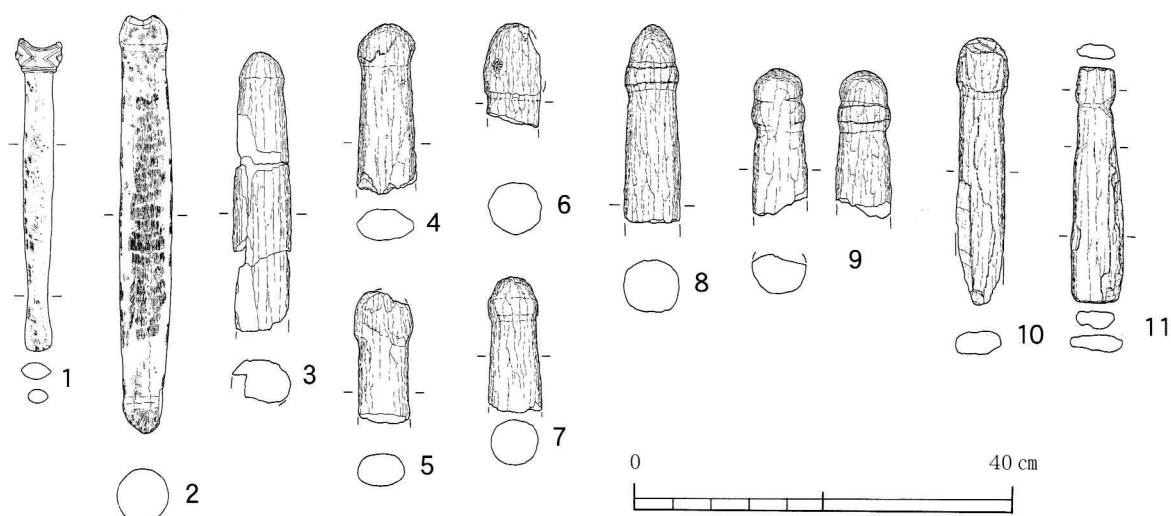


図2 各型式の石棒 1 (1/8)

参考資料 (1 山梨・金生)、I A 類 (2 瀬戸)、I Ba 類 (3 井手東Ⅱ、4 北青木、5 門田、6 三軒屋)、I Bb 類 (7 三谷、8 東奈良、9 長原)、II Ba 類 (10 八尾南、11 船尾西)

### Ⅲ 型式学的検討

#### 1 従来の分類基準

石棒は、概してそれほど多くの形態的变化を持つものではなく、縄文中期に出現して以降、大きな地域的・時間的変化をみせることなく継続した遺物である。また、破片で出土することが多く、どの型式に分類しえるのか判断が容易でない場合が極めて多いといえよう。

濫谷昌彦は、最近の論考(1995)のなかで頭部の有無を基準に、有頭(両頭と単頭)、無頭に3大別し、さらにそれぞれの特徴によって細分するという、平面形態に基づいた分類基準を示している。大きな時間的・地域的変化のない石棒の分類基準としては十分に有効であろう。今回対象とする結晶片岩製石棒も基本的には濫谷の分類基準に従いつつ、断面形態をも考慮に入れて、実態に即した分類を試みたいと思う。

#### 2 結晶片岩製石棒の分類

##### 断面形態

近畿・瀬戸内地域における縄文から弥生にかけての結晶片岩製石棒では、縄文晚期中葉以前にみられたような、石刀・石剣のように意図的に刃部を作り出そうとした断面形態を呈するものは認められない。一見刃部のようにみえても、実は、結晶片岩特有の扁平に割れる性質によって断面形態も左右されることが多いからである。ここでは、明確に区別しえる以下の分類をおこない、それぞれをローマ数字によって表した。なお、断面径は大半が4 cmから7 cmのあいだにおさまるものの、規格性を指摘できるほどのまとまりはない(図1)。徳島県三好町土井遺跡 12.0 cm、神戸市戎町遺跡(写真8) 13.4 cmの2例は特に太い。

- I 断面正円形のものを基本とする。楕円形のものや、崩れた菱形のものも意図的ではなく、素材の形態や結晶片岩特有の割れ方によると考えてこれにふくめる。
- II 断面が著しく扁平で、角のとれた長方形を呈するもの。

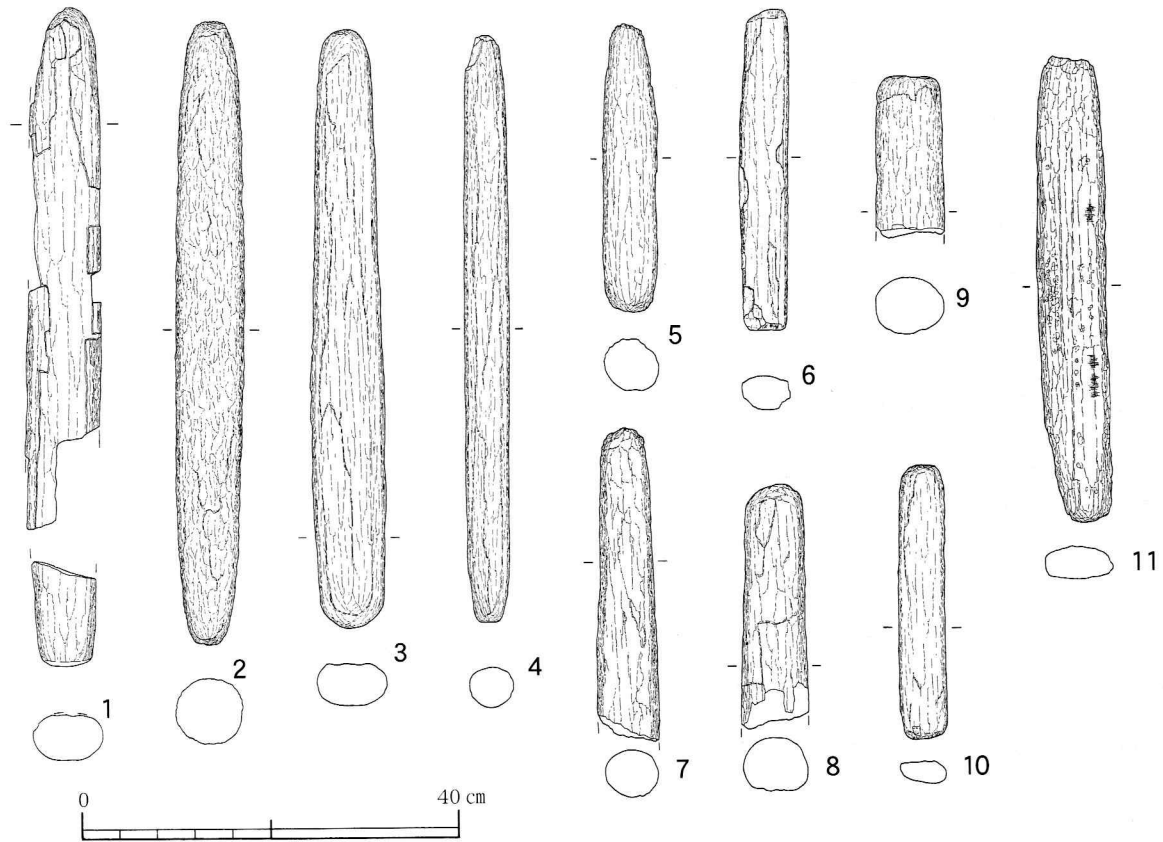


図3 各型式の石棒 2 (1/8)

I Ca 類 (1 大開、2 三谷、3 北白川追分町、4 樞原、5 丹比柴籬宮跡、6 磯山城、7 丁・柳ヶ瀬、8 長原)、I Cb 類 (9 小阪)、II Ca 類 (10 小阪、11 道後今市)

### 平面形態

今日までの研究の通例にしたがって、頭部の有無を中心とした分類をおこなう。大半の資料は、端部を両方とも欠いており分類不能である。また、途中で折れているものは一方の頭部の有無が不明である。しかし、ここでは単頭あるいは無頭として分類をおこなった。両頭・単頭・無頭の3つをアルファベットの大文字で表し、さらにそれぞれの特徴からアルファベットの小文字を活用して、小分類をおこなった。

- A 両頭
- B 単頭
  - a 段によって頭部を表現するもの。
  - b 鏝または沈線によって頭部を表現するもの。
- C 無頭
  - a 端部が丸いもの。
  - b 端部の平らなもの。

なお、今回の対象となる結晶片岩製石棒のほとんどが、敲打あるいは粗い研磨仕上げの粗製品であって、仕上げの最終調整に丹念な研磨を施した精製品は、私が確認しえた範囲では和歌山県白浜町瀬戸遺跡例 (図2-2、図18-4) 1点のみである。したがって、最終調整による精粗の別は、今回の分類基準には取り入れなかった。

以上の分類基準にしたがって、実際の資料を分類した。分類しえた資料、すなわち端部を有する資料は、全156点中75点である (表1)。



### 3 各型式の類例

I A 類 瀬戸遺跡例 (図 2-2、図 18-4) 1 例のみである。しかも、一方が 2 又に分かれる特異な形態をし、丹念に研磨を加えた精製品である。山梨県大泉村金生遺跡 (図 2-1、新津ほか 1989) 28 号住居出土の石剣に類例があり、これにつながる可能性がある。

I Ba 類 岡山県邑久町門田遺跡 (図 2-5、図 12-1)、高松市井手東Ⅱ遺跡 (図 2-3、図 12-4)、三谷遺跡 (図 14-3)、神戸市宇治川南遺跡、同市北青木遺跡 (図 2-4、図 15-9)、大阪市亀井遺跡 (図 16-2)、八尾南遺跡 (図 16-18)、泉佐野市三軒屋遺跡 (図 2-6、図 17-4)、和歌山市川辺遺跡 (図 18-1)、和歌山県南部川村徳蔵遺跡 (2 例) に計 11 例がある。

I Bb 類 三谷遺跡 (図 2-7、図 14-5)、茨木市東奈良遺跡 (図 2-8、図 16-1)、長原遺跡 (図 2-9、図 16-8) に計 3 例。

II Ba 類 八尾南遺跡 (図 2-10、図 16-17)、堺市船尾西遺跡 (図 2-11、図 17-2) に計 2 例。

I Ca 類 最も一般的なものである。三谷遺跡 (図 3-2、図 13-5~7・9・10、図 14-1・4・6~11)、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡 (図 3-7、図 15-1・2)、大開遺跡 (図 3-1、図 15-5)、長原遺跡 (図 3-8、図 16-9~12)、松原市丹比柴籬宮跡遺跡 (図 3-5、図 17-1)、橿原遺跡 (図 3-4、図 17-8)、京都市北白川追分町遺跡 (図 3-3、図 17-7)、滋賀県米原町磯山城遺跡 (図 3-6、図 18-6) など枚挙に暇がなく、計 48 例認められる。また、川原石の形態を利用してほとんど手を加えなかったもの (図 14-6・10) も本類に組み込んだ。長さは 20 cm 程度のものから 60 cm を越えるものまでばらつきがあって、完形品の数が限られる現状では規格性を指摘することはできない。ただ、いずれも 60 cm をこえる三谷遺跡例 (図 3-2)、大開遺跡例 (図 3-1、復元)、橿原遺跡例 (図 3-4)、北白川追分町遺跡例 (図 3-3) には、一定のまとまりをうかがうことができよう。

出土点数として三谷遺跡の 13 例は突出しており (表 1)、後述するように、生産と流通を考える重要な資料となる。

I Cb 類 戎町遺跡 (写真 8)、堺市小阪遺跡 (図 3-9、図 17-5)、川辺遺跡 (図 18-2) の計 3 例。断面幅が全長に比して大きい「ずんぐり」とした形態をする。

II Ca 類 松山市道後今市遺跡 (図 3-11、図 12-2)、小阪遺跡 (図 3-10、図 17-3) の 2 例がある。

分類基準に当てはまるのは以上がすべてである。しかしながら、いくつかの例外が認められるので、以下に示しておきたい。

小型の石棒 和歌山県下津町下遺跡出土の 2 点 (図 4) は、ほかに類例のない小型品で、ともに結晶片岩の小円礫に加工を施したものである。1 は扁平な断面を呈し、両側面に溝を施して頭

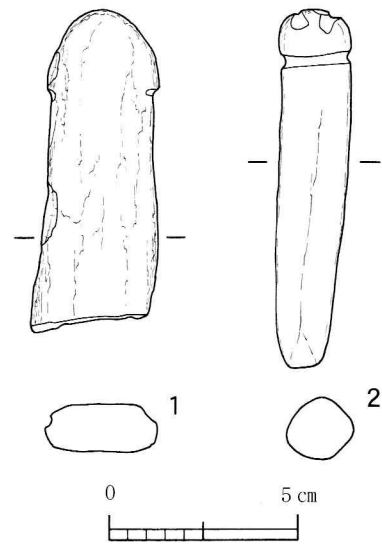


図 4 下遺跡出土小型の石棒 (1/2)

表1 型式別集計表

県名	遺跡名	I A 類▼	I Ba 類○	I Bb 類△	II Ba 類▲	I Ca 類●	I Cb 類□	II Ca 類■	小型	未製品×	計
岡山	津島岡大					1					1
岡山	門田		1								1
高知	田村					1					1
愛媛	道後今市							1			1
愛媛	阿方					1					1
香川	井手東Ⅱ		1								1
徳島	大柿					5					5
徳島	名東					2				1	3
徳島	三谷		1	1		13				2	17
兵庫	丁・柳ヶ瀬					2					2
兵庫	戒町						1				1
兵庫	大開					1					1
兵庫	宇治川南		1								1
兵庫	雲井					2					2
兵庫	北青木		1								1
兵庫	口酒井					1					1
大阪	東奈良			1							1
大阪	亀井		1								1
大阪	長原			1		4					5
大阪	田井中					1					1
大阪	八尾南		1		1						2
大阪	丹比柴籬宮跡					1					1
大阪	船尾西				1						1
大阪	小阪						1	1			2
大阪	三軒屋		1								1
和歌山	川辺		1			1	1				3
和歌山	下								2		2
和歌山	徳蔵		2			3					5
和歌山	瀬戸	1									1
奈良	樞原					2					2
京都	北白川追分町					1					1
滋賀	滋賀里					2					2
滋賀	上出A					2					2
滋賀	北仰西海道					1					1
滋賀	磯山城					1					1
計		1	11	3	2	48	3	2	2	3	75

注：破片のため型式のわからないものは省いた。

部を表現する。残長 8.5 cm、幅 3.0 cm、厚さ 1.2 cm、重さ 49.1g である。2 は沈線で頭部を表現し、端部にも刻みを施す。長さ 9.4 cm、幅 1.8 cm、厚さ 1.7 cm、重さ 60.4g である。

未製品 石棒は基本的に素材の獲得後、剥離、敲打を経て製品として仕上げる工程をおこなうが、ここでは頭部の加工をおこなう以前のもの、最終調整を施す以前のものを未製品として取り扱いたい。徳島市名東遺跡から素材に剥離を加えたもの 1 点（図 8 - 1、図 13 - 3）、三谷遺跡から、剥離から敲打へと進行中のものと、敲打途中のもの計 2 点出土している（図 8 - 2・3、図 13 - 8、図 14 - 12）。なお、製作工程については、生産と流通を考えるなかで後述する。

#### 4 型式別の分布とその考察

今回分析対象とする結晶片岩製石棒は、多くが長原式から初期の遠賀川式土器にかけての比較的短期間のうちに製作・使用されたことはすでに述べた通りである。したがって、以上の分類成果は、時間的な変化を示すものではなく、同時期の多様性としてとらえるべきものであるし、ま

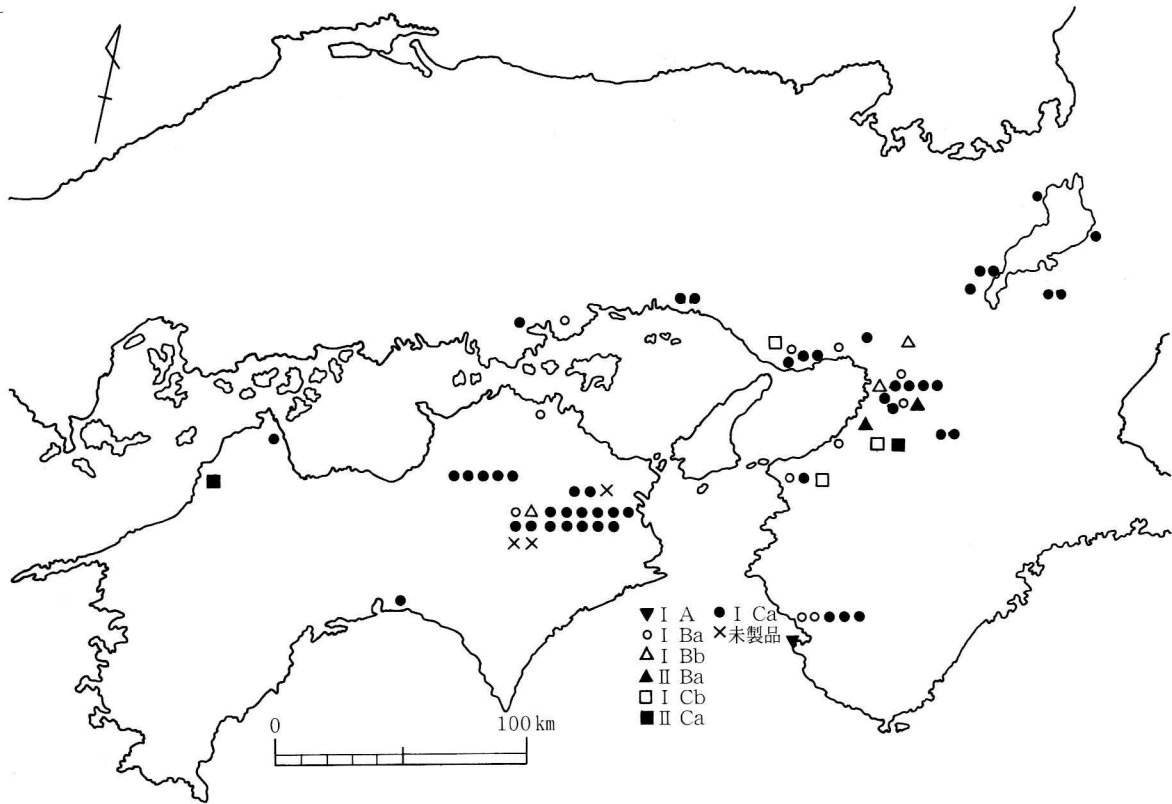


図5 型式別分布図

た、何らかの地域色を示している可能性もある。そこで、図5に型式別の分布図を作成した。表1とあわせて読みとれることを考えてみたい。

分類しえた石棒75点のうち48点、実に全体の64パーセントをI Ca類が占める。次いでI Ba類の11点が続くが、これ以外は最高でも3点であって、型式別の分布から地域色を指摘することは、現時点では断念せざるをえないだろう。しかしながら、I Ca類48点のうち13点が三谷遺跡から出土しているのは特徴的である。名東遺跡の2点、三好町大柿遺跡の5点をあわせて21点、I Ca類の40パーセント以上が徳島の遺跡から出土していることになる。また、未製品3点も現時点ではすべて徳島の遺跡出土であって、徳島の各遺跡が、より多くの石棒と未製品を保有していることは、明確に読みとることができる。こうした事実は、のちに述べるように、生産と流通を考える際に重要な資料となるのである。

#### IV 結晶片岩製石棒の生産と流通

##### 1 未製品からみた製作遺跡の推定

結晶片岩は、三波川帯<sup>8</sup>という「関東山地に始まり、西南日本の中央構造線の外側に接して、中部地方の天竜川流域から紀伊半島・四国を経て九州佐賀関半島まで、延長700 km余にわたる結晶片岩地域（新村編1991）」において産出する。この、広域にわたる変成岩帯から、黒曜石やサ

ヌカイトのように産地を特定することは容易ではない。ところが、図 11 の今回集成した石棒の分布図に示した三波川帯の範囲からみてわかるように、近畿・瀬戸内地域ではおおむね和歌山および徳島に限定してもよいことになる。そして、香川・兵庫・大阪・奈良北中部・京都・滋賀といった地域のもは搬入品であると考えることができよう。しかし、地質学的にはこれ以上の絞り込みはできない。

ここで、大きな手がかりとなるのが未製品なのである。すなわち、結晶片岩の産出地と、未製品とのかかわりを調べることによって、製作遺跡の特定をはかろうというのである。

まず、結晶片岩を産出する和歌山・徳島の各遺跡をみてみよう。該当する遺跡は、  
 和歌山 川辺遺跡(図 11 - 33)・下遺跡(図 11 - 34)・御坊市堅田遺跡(図 11 - 35)・徳蔵遺跡(図 11 - 36)・瀬戸遺跡(図 11 - 37)  
 徳島 大柿遺跡(図 11 - 7)・土井遺跡(図 11 - 8)・名東遺跡(図 11 - 9)・三谷遺跡(図 11 - 10) ということになる。

このうち、まず堅田・徳蔵・瀬戸の 3 遺跡は三波川帯から遠く離れているので除外することになる。次に、下遺跡は、例外の小型品 2 点が出土するだけなので、これも除外できる。そうすると、候補として残るのは、

川辺遺跡・大柿遺跡・土井遺跡・名東遺跡・三谷遺跡

以上の 5 遺跡ということになる。それぞれの出土点数は、川辺遺跡 3 点、大柿遺跡 6 点、土井遺跡 1 点、名東遺跡 4 点、三谷遺跡 20 点(2 点は戦前出土、すでに散逸)である。ところが、製作遺跡としての手がかりとなる未製品を出土するのは、名東遺跡(1 点)、三谷遺跡(2 点)だけである。

このなかで川辺遺跡例は、縄文晩期前半から末にいたる包含層からの出土であって、石棒の所属時期にいま一步不明確な点がある。また、結晶片岩産出地の紀ノ川南岸ではなく、北岸に立地するという不利な点がある。大柿遺跡・土井遺跡も吉野川北岸に立地しているし、未製品が出土していない。以上のことから、現時点で確実に石棒製作にかかわった遺跡としてとりあげることのできる遺跡は、名東遺跡・三谷遺跡という、ともに徳島市の眉山北麓に位置する 2 遺跡に絞り込むことができた。

結晶片岩を産出する三波川帯に接して立地し、しかも未製品を保有することからみて、名東遺跡・三谷遺跡が石棒製作にかかわった遺跡であるということは間違いあるまい。特に、三谷遺跡は、18 点(戦前出土の 2 点は除く)中 17 点が端部(表 1、図 5)という圧倒的にほかを凌ぐ出土数からみても、石棒製作遺跡と断定しえよう。

石材の産出地に隣接して営まれた石棒製作遺跡としては、群馬県松井田町西野牧小丸山遺跡<sup>9</sup>(福山ほか 1997)、岐阜県宮川村塩屋金清神社遺跡(早川・和田・村松ほか 1981、林 1992)、兵庫県竹野町見蔵岡遺跡(松井・大下ほか 1997)に続く 4 例目の遺跡ということができよう。

ここで確認しておきたいのは、私は結晶片岩製石棒がすべて徳島で生産されたとは考えていない、ということである。むしろ、将来的には和歌山でも三谷遺跡と同じような遺跡が見つかる可能性は高いといえよう。しかし、いま仮に和歌山での石棒製作を考えてみたとしても、少なくとも三波川帯の無数の遺跡で無秩序に製作されたという考え方は賢明ではないのである。

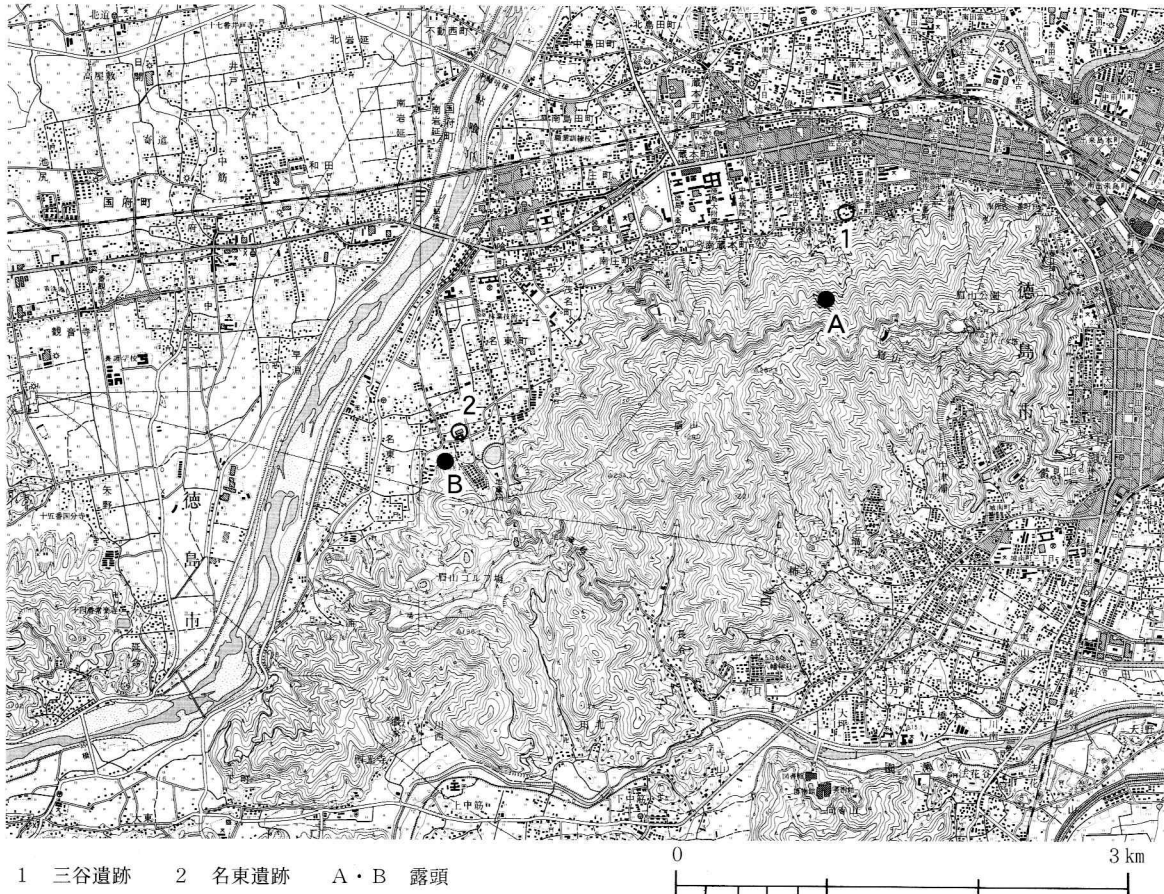


図6 名東遺跡・三谷遺跡と紅簾片岩の露頭

現時点で製作遺跡を特定し、消費遺跡との有機的な関係を検討しえるのは名東遺跡・三谷遺跡においてほかにはあるまい。ここでの目的は、縄文晩期末から弥生前期初頭にかけての生産と流通や儀礼を通してのむすびつきを具体的に描くことにあるのだ。

## 2 名東遺跡・三谷遺跡における石材の獲得

前節でみたように、名東遺跡・三谷遺跡という徳島市眉山北麓の遺跡群を、三波川帯の結晶片岩と結びついた石棒製作遺跡として位置づけることができた。ここでは、以上の自説をさらに補強するために、実際、製作遺跡でどの程度の石材を確保できるのか、遺跡と石材を獲得できる場所とはどれほどの距離があるのか、また、実際に各地で出土している石棒と同じ石材を確保できるのか、といった点を確認しようという試みをおこなった。

具体的な方法としては、まず、①名東遺跡・三谷遺跡に隣接する眉山の露頭や谷の転石を調査

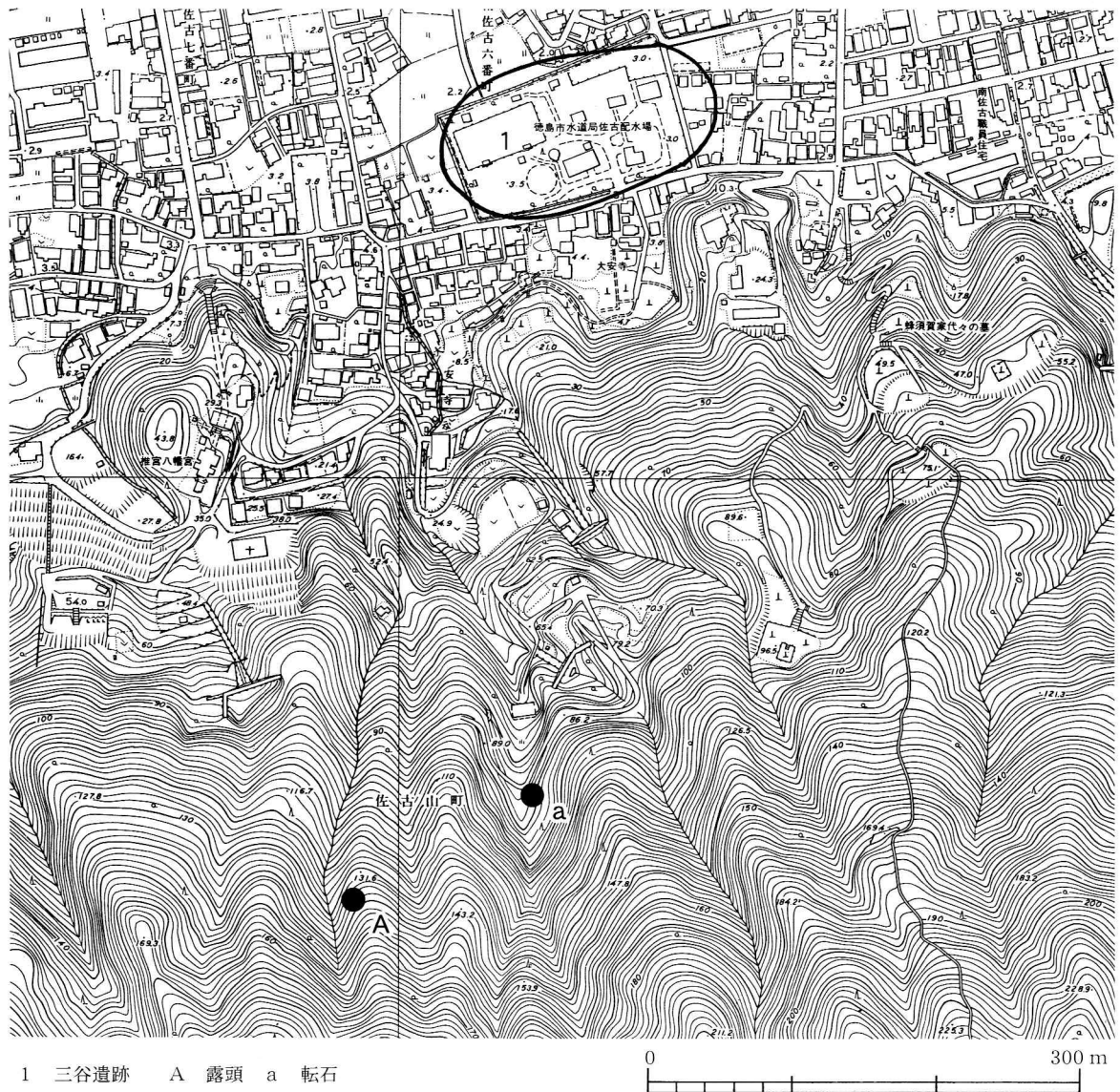


図7 三谷遺跡と紅簾片岩の露頭・転石

し、写真撮影・標本の採集をおこなう。さいわい、岩崎正夫・中川衷三をはじめとする徳島大学教育学部（現総合科学部）の先学によって眉山の詳細な地質図（岩崎 1955、岩崎ほか 1970 など）が公表されており、わかりやすい露頭の所在地を明記した一般向きの案内書（岩崎編 1979、中川編 1981 など）も刊行されている。これらを十分に活用しつつ作業をおこなった。さらに、②この標本と他地域出土の石棒を肉眼観察で比較する。ただし、一口に結晶片岩といっても、いくつかに分類することができる<sup>10</sup>。今回すべての種類を分析することは時間的に不可能なため、紅簾片岩という特徴的な種類に的を絞ることにした。紅簾片岩製の石棒は、全国的に見てそれほど多くの類例があるものではなく、産地を絞り込む有力な資料となる可能性があると考えたからである。

まず、名東遺跡・三谷遺跡の位置を再確認しておきたい（図 6）。いずれの遺跡も眉山北麓（写真 1）に位置する。三谷遺跡（図 6 - 1）は眉山北麓ほぼ中央の微高地上に位置しており、名東遺跡（図 6 - 2）は、北西側を流れる吉野川の支流鮎喰川の扇状地に面したところに位置してい

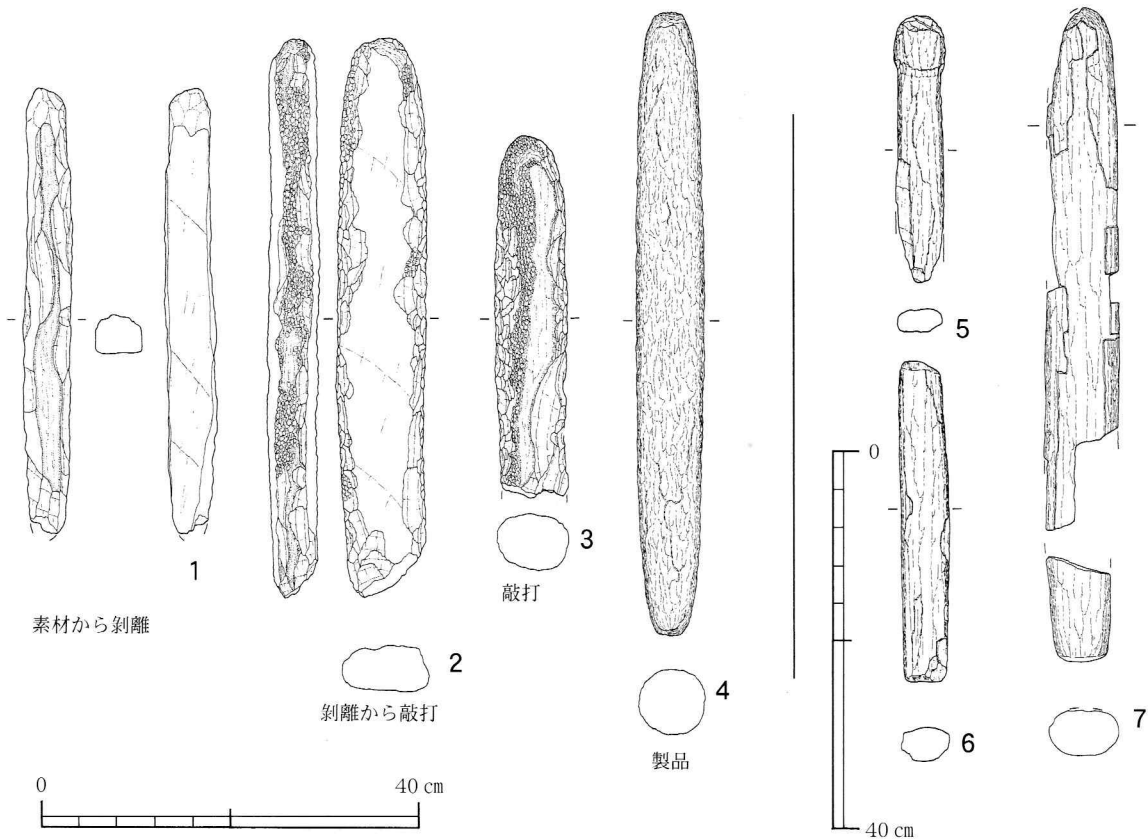


図8 製作工程の復元(左)と紅簾片岩製の石棒(1/8)

(1 名東、2~4 三谷、5 八尾南、6 磯山城、7 大開)

る。黒点 A・B が紅簾片岩の露頭の位置である。いずれも遺跡からそれほどの距離ではないことがみてとれる。

次に、三谷遺跡と紅簾片岩の露頭との位置を図7に示した。三谷遺跡のすぐ南、眉山の北斜面に谷がある。この通称「蛇谷」には、石棒の素材となりうるたくさんの転石が存在する(写真2)。この谷に沿って山道があり、標高150mほどのところで紅簾片岩の露頭を確認することができた(図7-A、写真3)。そこで標本を採集した(写真7)。そこからやや下ったところ、標高90mほどのところに紅簾片岩の転石を確認することができた(図7-a、写真4)。現在転石が確認できるのは、標高30m前後までであって、遺跡付近では護岸工事が進み、砂防ダムも築かれている。しかし、当時は遺跡付近でも転石を獲得できた可能性が高いといえるだろう。また、名東遺跡の位置する天理教名東教会(図6-2)から南へ100mほどのところに尾根の先端部分があり、そこに紅簾片岩が露出している(図6-B、写真5)。その標本が写真6である。

次に、実際各地で出土している紅簾片岩製の石棒との比較を試みよう。紅簾片岩製の石棒は、戎町遺跡(写真8、神戸市教育委員会所蔵)・大開遺跡(図8-7、図15-5)・八尾南遺跡(図8-5、図16-17)・磯山城遺跡(図8-6、図18-6)から1点ずつ出土している。なかでも、戎町遺跡出土の石棒は名東遺跡(図6-B、写真6)・三谷遺跡裏の露頭で採集した標本(図6-7-A、写真7)に類似していることがみてとれよう。

表2 結晶片岩製石棒出土主要遺跡ごとの諸要素の比較

	出土点数	端部数	完存品数	未製品数	平均残長 (cm)	平均重量 (g)
三谷 (徳島)	18	17	3	2	27.4	1663.8
名東 (徳島)	4	3	2	1	27.4	1402.3
大柿 (徳島)	6	5	0	0	21.4	1057.4
大開 (兵庫)	12	1	0	0	14.5	425.9
北青木 (兵庫)	5	1	0	0	12.8	277.1
口酒井 (兵庫)	16	1	0	0	9.0	393.3
長原 (大阪)	22	5	0	0	11.7	—
田井中 (大阪)	4	1	0	0	16.3	550.7

注：三谷は2点散逸。大開遺跡では1点完形に復元しえたものの、破碎されていたので完存品としてカウントしない。

### 3 生産と流通の実態

前節まででみたように、結晶片岩製石棒の製作遺跡として名東遺跡・三谷遺跡といった徳島の遺跡をあげることができた。それでは、これらの遺跡からどのような形で各地へと流通していったのであろうか。現時点では、おおむね以下のような4つのケース(③はA・Bに細分)を考えることが可能であろう。

- ①名東遺跡・三谷遺跡は結晶片岩の採掘地であって、素材が近畿・瀬戸内地域へと運ばれ各地で石棒の製作がおこなわれた。
- ②各地から名東遺跡・三谷遺跡へと集まって、石棒の製作をおこない、持ち帰った。
- ③徳島の在地の集団が、内外の需要に応じて、なかば専門的に製作に従事した。

A 名東遺跡・三谷遺跡は石棒製作専門の遺跡である。

B 名東遺跡・三谷遺跡は基本的には集落址であり、自らも石棒の儀礼をおこないつつ、他地域の需要にも応えて石棒製作をおこなった。

まず、①の可能性はどうか。両遺跡では素材ばかりではなく、未製品・製品もみつまっている。そこで、名東遺跡・三谷遺跡から出土した3点の未製品から、製作工程の復元を試みた(図8左)。1は、自然面を残した結晶片岩の素材に剝離を加えはじめたものである<sup>11)</sup>。2は、剝離を終え敲打を開始した状態のものである。3は敲打によって、石棒としての形をほぼ整えたものであって、最終的には4の製品となる。このように、不十分なながらも製作工程を復元でき、しかも多数の製品が出土する以上は、両遺跡が単なる石材の採掘遺跡ではないということは確実であろう。したがって、まず①の可能性をはずすことができる。

次に②はどうだろうか。表2に、主な遺跡の出土点数・端部数・完存品数・未製品数・平均残長・平均重量を示したので、これをみながら考えることにしよう。

各地の集団が名東遺跡・三谷遺跡へと集まって石棒を製作し持ち帰ったのなら、遜色ない数の石棒が、他地域で出土してもおかしくはない。実際、出土点数のみを比較した場合、大開遺跡で12点、口酒井遺跡で16点、長原遺跡で22点と、両遺跡を上回る点数の石棒が大阪や兵庫で出土しているのである。ところが、これらは小片でもカウントするので、同一個体を重ねて数える危険性がある、必ずしも実態を表しているとはいえないのである。そこで、前章でおこなった



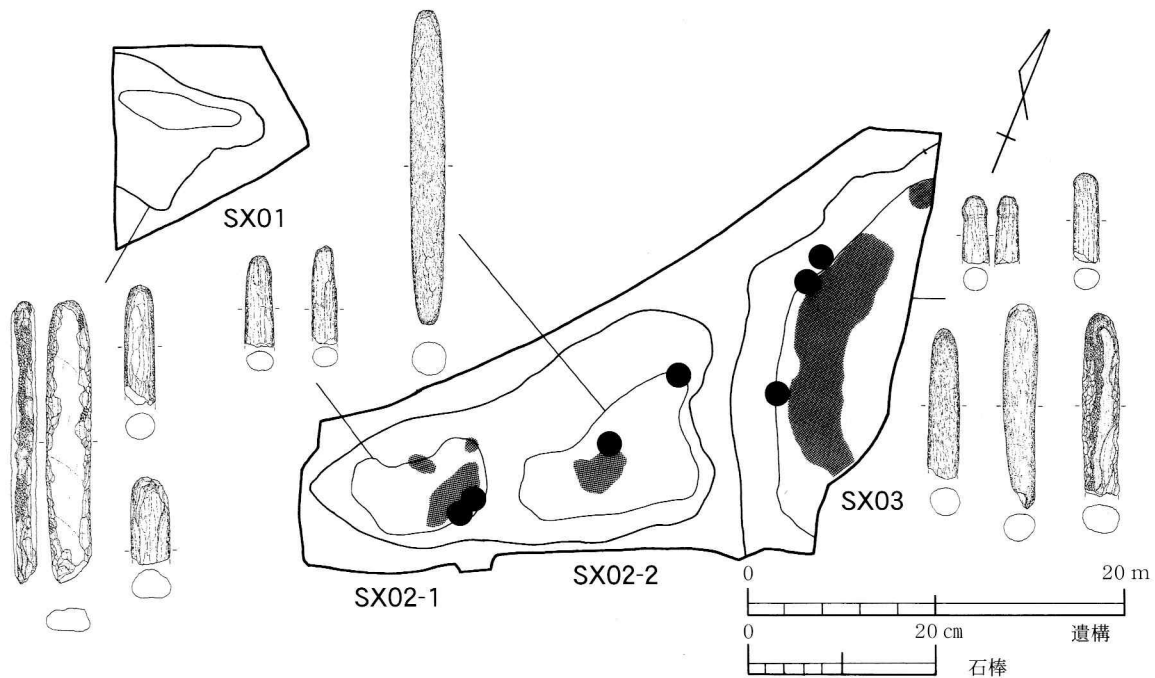


図9 三谷遺跡石棒出土状況

(黒点はイヌの埋葬地点・トーンは貝層)

型式分類を利用して、各遺跡の端部数を比較した。ここでは、前章の表1と表2をあわせて参照してみよう。そうすると、出土点数と端部数とは、遺跡ごとに大きく変わることが理解できる。すなわち、三谷遺跡では18点中17点、名東遺跡では4点中3点、大柿遺跡では6点中5点が端部を有しているのに対し、大開遺跡では12点中わずかに1点、北青木遺跡では5点中1点、口酒井遺跡でも16点中1点、長原遺跡では22点中5点、田井中遺跡では4点中1点である。ここで、ふたたび前章の型式別の分布図(図5)をみてみよう。この図からも、端部を有する資料の多くが徳島の遺跡から出土していることをあらためて確認できるのである。また、完存品と未製品は名東遺跡・三谷遺跡以外、ここで取り上げた遺跡からは出土していない。

次に、平均残長は三谷遺跡 27.4 cm、名東遺跡 27.4 cm、大柿遺跡 21.4 cm に対して、大開遺跡 14.5 cm、北青木遺跡 12.8 cm、口酒井遺跡 9.0 cm、長原遺跡 11.7 cm、田井中遺跡 16.3 cm と徳島の3遺跡がほかの5遺跡を大きく上回る。また、平均重量は三谷遺跡 1663.8g、名東遺跡 1402.3g、大柿遺跡 1057.4g に対して、大開遺跡 425.9g、北青木遺跡 277.1g、口酒井遺跡 393.3g、田井中遺跡 550.7g とこちらも徳島の3遺跡が圧倒的に上回る。以上のように、徳島の3遺跡とそのほかの遺跡とのあいだには大きな相違点があり、これが、それぞれの遺跡の性格を決定する証拠となるのである。

石棒の具体的な使用法は、それが儀礼の道具である以上、推測に頼らざるをえない。しかし、出土点数に比べて端部数が著しく少なく、残存率も低いということは、石棒を破碎するという形での消費を想定すべきであろう。すなわち、徳島の3遺跡とそのほかの遺跡との相違点は、そのまま生産地と消費地の実態、ないしは生産地に近く製品を容易に入手しえる遺跡と生産地から離

れた遺跡との消費の仕方の違いを端的に示していると考えられるのである。

また、他地域から徳島へ石棒製作のために集まったのならば、相当数の各地の搬入土器があったと想定できる。名東遺跡・三谷遺跡の土器は、いずれも口縁端部から下がったところに突帯を施し、口縁端部を刻み、底部は尖底という特徴を持った深鉢と、波状口縁で内面に沈線を施した浅鉢というセットを基本とする。この土器は、非常に個性的であって、他地域の土器とは比較的容易に区別できる。たとえば、長原遺跡出土の土器に顕著な、口縁端部に接する位置に突帯を施し、口縁端部を刻まない平底の深鉢、浅鉢をほとんど持たないという、いわゆる長原式の特徴とは著しく異なっている。ところが、名東遺跡・三谷遺跡では、集団の大規模な移動を示すほど顕著な数の搬入土器は認められないのである。以上の2点から、②の可能性も極めて低いといえるだろう。

以上の結果残ったのは③である。三谷遺跡では、3つの自然凹地がみつかり、貝塚の形成、炭化米<sup>12</sup>をはじめとする各種動植物遺体の堆積、7体にもおよぶイヌの埋葬といった継続的な生業活動の痕跡が確認されている(図9)。居住域こそ未発見ではあるが、石棒を製作する目的だけで営まれた遺跡、つまり③Aでないことは明らかである。また、イヌの埋葬と石棒の出土状況との明確な関連性は確認されていないが、何点かはイヌの葬送儀礼に用いられた可能性がある(図9)。すなわち、三谷遺跡の集団自らも石棒の儀礼をおこなっていた③Bの遺跡だったのである。

以上の検討から、名東遺跡・三谷遺跡の集団は、自ら石棒を消費するとともに、他地域の需要にも応えて、短期間に集中して石棒生産をおこなったと理解しえるのである。

## V 石棒生産時期の検討

結晶片岩製石棒が、縄文晩期末から弥生前期初頭の短期間に盛行したことはすでに述べてきたとおりである。ここでは、製作遺跡である名東遺跡・三谷遺跡の時期とそのほかの遺跡との併行関係を中心に、もう少し詳細に所属時期について検討してみたい<sup>13</sup>。

### 1 名東遺跡・三谷遺跡の時期

名東遺跡・三谷遺跡は、いずれも短期間に営まれた遺跡である。名東遺跡は、2条の突帯を持つ突帯文土器でも終末期の単純遺跡である(勝浦1990)。また、三谷遺跡は同じく2条の突帯文土器を主体としつつも、少量の遠賀川式土器がともなう遺跡であり、下層の貝層をふくんだ自然凹地と上層の包含層とでは土器に若干の変化が認められる。下層の遠賀川式土器は、段によって口縁部・頸部・胴部を区画した壺、胴部無文の甕というセットをなしている。これに対して上層では、下層にはなかった削り出し突帯を施した壺、胴部上半に少条沈線をめぐらせた甕がともなっている(勝浦・木村1997)。すでにこの時期、西方600mほどの庄遺跡では遠賀川式土器を主体とした集落の形成がはじまっていた。三谷遺跡はこの時期をもって埋没し、同時に突帯文土器の使用・石棒の製作も終わりを告げるのである。その後の、突帯文土器をともなわない少条沈線を施した壺・甕を基本とする弥生前期中葉の土器群、さらには貼り付け突帯をめぐらせた弥生前期末の土器群には石棒はともなわない。

## 2 ほかの遺跡との併行関係

今回集成した石棒は、包含層や流路から出土したものが多く、一括性の高い遺構から出土したものはそれほど多くはない。確実な類例は、今治市阿方遺跡、大開遺跡、雲井遺跡、口酒井遺跡、亀井遺跡、長原遺跡、田井中遺跡の7遺跡であろう。このうち、阿方遺跡、雲井遺跡、口酒井遺跡、長原遺跡は、突帯文土器でも後半の長原式を主体とし、少量の遠賀川式土器がともなうことがある。これらは、名東遺跡や三谷遺跡の下層と併行するとみてよいだろう。次に、大開遺跡、亀井遺跡では古いタイプの遠賀川式土器とともに出土している。これらは、三谷遺跡の上層と接点を持っていたといえよう。現時点で、名東遺跡・三谷遺跡埋没後の弥生前期中葉・末の土器にともなう確実な類例はない。これ以外の流路・包含層資料、詳細な内容が公表されていない資料にしても、基本的には名東遺跡・三谷遺跡出土土器と接点を持っている。また、名東遺跡・三谷遺跡より古い、突帯文土器の前半に確実にともなう類例は、道後今市遺跡、土井遺跡、下遺跡の3例、しかも小型の下遺跡例を除くと2例にすぎない。以上のことから、名東遺跡・三谷遺跡で石棒製作がおこなわれていた期間と、近畿・瀬戸内地域で結晶片岩製石棒が盛行する時期はほぼ一致するということができよう。

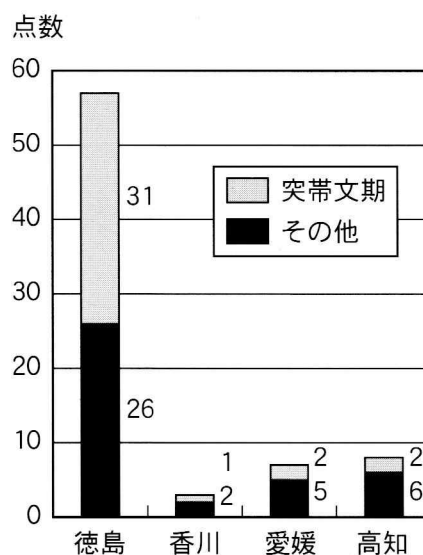


図10 四国4県別石棒出土点数

## VI 結晶片岩製石棒の分布とその意味

今回集成した結晶片岩製石棒は46遺跡156点である(表3、図11)。西は岡山・愛媛・高知から東は滋賀・奈良・和歌山にいたるまで分布している。しかし、実際に分布の中心となるのは、徳島から大阪湾沿岸および紀伊水道に面した諸地域である。とくに四国東部と近畿地方との強いつながりをうかがうことができよう。徳島と分布が希薄な香川・愛媛・高知といった四国西部との差は非常に大きい、実はこれには前史があるのである。

私は昨年、四国地方の石棒を集成する機会を持った(中村2000c)。後に判明した分を加えると、四国出土の石棒73点中57点が徳島出土で、香川は3点、愛媛が7点、高知が8点であった。実に、四国出土の石棒の8割近くが徳島に集中する。ここから縄文晩期末から弥生前期初頭の石棒を省いてみよう。徳島では、名東遺跡、三谷遺跡、大柿遺跡の計31がはずれて26点となる(図10)。ほか、香川2点、愛媛5点、高知6点である。それでもなお徳島の石棒が多いのは、晩期以前から、石棒を多用する近畿地方との交流の下地があったからにほかならない。いい換えれば、縄文晩期末から弥生前期初頭の結晶片岩製石棒の分布には、それまでの長い交流史が反映されているのである。

しかしながら、これだけでは小型化・精製化という方向性にあった石棒が、ふたたび大型化・粗製化する意味は説明できない。10数年前までであれば、法則的に「階層性の萌芽」と解釈すれ

ば済んだ石棒終焉の持つ意味を、いま、あらためて問いなおす必要があるのだ。しかも冒頭で、実証的な地域的研究の重要性を主張した以上は、民族誌の安易な導入は極力さげなければならない。

前章までの検討で、粗製大型石棒がふたたび盛行するのは、縄文晩期でも末から弥生前期初頭の土器編年でいえば2～3型式に満たない程度の短期間であり、このあいだに名東遺跡・三谷遺跡といった徳島の集団が、自ら石棒を消費するとともに、他地域の需要にも応えて集中的に石棒生産をおこなったと論じてきた。これをいい換えれば、徳島市の眉山北麓でおこなわれた結晶片岩製石棒を用いた儀礼を、大阪湾および紀伊水道沿岸を中心とした近畿・瀬戸内地域の集団も必要とするような局面が、縄文晩期末から弥生前期初頭にかけての短期間に生じたのであり、これに応える形で石棒生産がおこなわれたということになる。

ここでは、特に縄文晩期末から弥生前期初頭という時代背景に配慮したい。なぜなら、この時期は、多くの文物とともに、新しい儀礼・社会のしくみが伝わる時期に相当するからである。

徳島は、石棒の儀礼を多用した地域のなかでももっとも西方に位置する。ある時期に新しい文物に直面する事態が生じたに違いない。これらを積極的に導入しようという動きとともに、一方では反動として、いままでの社会秩序を維持しようとする意識がはたらいたとしよう。その結果、伝統的な儀礼をさかんにおこなうにいたったのではないだろうか。そうして、徳島と石棒の儀礼をおこなう上で長い交流史を持っていた大阪湾から紀伊水道沿岸といった地域がこれに呼応した。これが、結晶片岩製石棒の分布という形(図5、図11)で明確に現れたと理解するのである。

#### まとめ ー石棒の終焉からみた「縄文から弥生」ー

西日本における「縄文から弥生」は、突帯文土器・遠賀川式土器の分布圏として、ひとまとめに捉えることができる。しかしながら、石棒の終焉からみた場合、近畿・東部瀬戸内地域には、中部瀬戸内以西の地域とは異なる、伝統的な石棒の儀礼に固執する状況を確認することができる。その背景には、すくなくとも縄文後期以来の長い地域間交流があったと考えるべきで、これを抜きに弥生時代の成立と展開は説明できないのである。もっとも象徴的なのは、近畿地方最古の環濠集落である大開遺跡をはじめ、東奈良遺跡・亀井遺跡・田井中遺跡・堅田遺跡といった初期の「弥生集落」からもこの石棒が出土しているということである。この事実は、石棒の儀礼をおこなった人々が、「弥生集落」の成立にもかかわったことを暗示しているのではあるまいか。

以上のように、今回の研究では、長い伝統のなかで石棒の儀礼をおこなってきた人々が、「弥生集落」の成立にもかかわったという結論に達した。したがって、香川・金山産のサヌカイトという実用品の移動をもって、近畿地方における弥生時代の成立を、香川方面からの遠賀川系集団の移動ととらえる見方とは異なる立場となった。今後は、さらに「多角的な視点」から「縄文から弥生」という課題にとりくみたいと考えている。

今回の研究をおこなうにあたって、塩田次男(徳島大学総合科学部)、村田 守・小澤大成(鳴門教育大学自然科学系)、元山茂樹(県立徳島工業高校)の4先生には、結晶片岩についての基礎知識をご教示いただいた。また、後藤信祐氏(栃木県埋蔵文化財センター)には、研究史部分の草稿に目を通していただき、様々なご指摘をいただいた。なお、資料の集成・実見・掲載に際しては、以下の諸氏・諸機関のご協力をえた、記して感謝の

意を表したい。

一山 典、伊藤淳史、大北和美、大関逸子、小長谷正治、樫山嘉郎、勝浦康守、亀島重則、川崎雅史、北原 治、久貝 健、葛原秀雄、久保脇美朗、栗林誠治、小島 功、渋谷高秀、清水芳裕、多田 仁、田中清美、田中昌樹、谷 正俊、千葉 豊、富井 眞、富田博之、豊岡卓之、永光 寛、中村健二、禰宜田佳男、野崎貴博、濱野俊一、平田朋子、深井明比古、前沢郁浩、増田達彦、丸山 潔、三浦基行、南 博史、宮崎幹也、森井貞雄、森田尚宏、安田 滋、山本三郎、山元 健、山本英之、若林邦彦

茨木市立文化財資料館、神戸市教育委員会、八尾市立歴史民俗資料館、飛騨みやがわ考古民俗館

## 註

- 1 こうした動向のなかで、佐藤由紀男（1999）のめざした「縄文から弥生への移行を多角的な視点から捉える」という研究姿勢を、私も取り入れたい。
- 2 2000点以上におよぶ刀剣形石製品を、一個人の力量で全国的に集成した後藤の業績には敬意を表したい。
- 3 縄文晩期中葉、突帯文土器の直前型式である滋賀里Ⅲb式のころまでは、石刀・精製の石棒は健在であった。神戸市篠原遺跡出土の石刀（安田・須藤・松林 1993）や、姫路市堂田遺跡の粘板岩製精製石棒（松下勝ほか 1992）が、その確実な類例である。その後の滋賀里Ⅳ式・船橋式に属する類例はいまのところ確認できない。
- 4 以上はあくまでも 1986 年時点での評価であって、すでに後藤は最近の論考（1999）で、晩期に至るまで大型石棒が存続することを指摘し、近畿地方の突帯文期の石棒が大型品で、晩期中葉以前の石刀とは別系譜であることを論じている。
- 5 この 13 点は第 11 次調査出土のものであって、最近第 6 次調査の 1 点、第 8 次調査の 2 点計 3 点が公表された（浅岡ほか 2000）。したがって、口酒井遺跡出土の石棒は 16 点である。
- 6 三谷遺跡（当時は水道三谷濾過池遺跡、佐古浄水場遺跡、大安寺遺跡などと呼称していた。）では 1924・25 年の調査でも石棒が出土している。森敬 1926 や当時の新聞記事（徳島毎日新聞 1925）には「石器時代の石棒」が出土したという記載があるだけだが、1960 年発行の『名東郡史』で、森は 2 点の石棒が出土したと述べている（森敬・小川 1960）。また、後に徳島県内の石棒を集成した羊我山人（本名は飯田義資、徳島県における戦後地方史の草分け的存在で、名西高等女学校：現名西高校にて歴史の教鞭をとった。）もこれを踏襲している（羊我 1961）。これらは残念ながら散逸してしまっており検証できないが、三谷遺跡出土石棒は計 20 点ということになる。
- 7 それまで、これら石棒は、漠然と「紀ノ川流域産」といわれていたのがであった、四国徳島での発見は、現在の行政区画にとらわれやすいわれわれにとっては盲点であったといえるだろう。
- 8 結晶片岩は、三郡帯という中国山地東部から北部九州にかけての地域にもみられる。しかし、縄文晩期終末から弥生前期初頭にかけてこの地域で石棒が盛行したという事実は確認できないので、近畿・瀬戸内地域の結晶片岩製石棒は、三波川帯の結晶片岩製であると断定してもよいだろう。ただし、結晶片岩は、のちに大陸系磨製石器の素材としても用いられるが、この場合は、三郡帯産の可能性も考慮にいれなくてはならない。
- 9 当地域の石材と石棒製作とのかわりかは、秋池 武（1997）の論考に詳しい。
- 10 三波川帯の結晶片岩は変成作用を受ける前の原岩によって、おおむね以下のように分類できるといふ。以下、岩崎の著作（岩崎編 1979）を引用し概観する。

①塩基性片岩（玄武岩質の溶岩が原岩、緑色片岩ともいう。）

②泥質片岩（泥岩が原岩、黒色片岩ともいう。）

③硅質片岩（チャートが原岩、石英片岩ともいう。）

④砂質片岩（砂岩が原岩、砂岩片岩ともいう。）

さらに、曹長石変斑晶の有無によってそれぞれが、点紋・無点紋にわけられる。この点紋は、塩基性片岩の場合白い斑点となることが多く、泥質片岩の場合は黒い斑点になるという。さらに、特徴的な鉱物の含有による小分類をおこなう。たとえば、紅簾片岩の正式名称は、紅簾石-硅質片岩となる（本稿では長くなるので紅簾片岩とする。）。なお、緑泥片岩なる用語を片岩類の総称として使用する例をしばしばみかけるが、緑泥片岩とは緑泥石を含有する塩基性片岩（緑泥石-塩基性片岩）のことであって、総称として用いるのは誤りであるという。

勝浦康守によると、三谷遺跡の石材鑑定は岩崎がおこなったという。そこで、私は各地の遺跡で撮影した写真と、三谷遺跡の石棒とを実際に比較してみた。各地で絹雲母片岩・黒色片岩・石墨片岩（実際はほとんど同じ）などと報告されている、片理が著しく発達して非常にもろいものが泥質片岩であることを確認できた。たとえば、長原遺跡や口酒井遺跡のものは、ほとんど点紋泥質片岩であろう。おおむね、点紋泥質片岩が最も多く、点紋塩基性片岩（緑色片岩）、紅簾片岩がこれに次ぐようである。ちなみに、名東遺跡・三谷遺跡に接する眉山の北斜面には、この3種の石材の露頭が豊富に存在し、谷へ入れば3種の転石とも容易に採集することができる。すなわち、石棒製作遺跡は、三波川帯ならどこでもよいというのではなく、点紋泥質片岩、点紋塩基性片岩、紅簾片岩という3種類の石材を同時に調達できる地点に限定できるのである。

- 11 ただし、1は先端部に擦痕がみとめられる。なかには川原石にほとんど手を加えないもの（図14-6・10、この場合も、遺跡まで運んだことは間違いない。）もあり、すべてが規格性をもって製作されたのではない。
- 12 報告書（勝浦・木村1997）には炭化米に関する記述はないが、速報展には出品されており、図録にも明記してある（勝浦1995）。
- 13 なお、徳島地域の縄文晩期から弥生前期にかけての土器編年を論じることが本稿の目的ではないため、詳細は勝浦（2000）と私（中村2000b）の論考を参照されたい。

## 引用・参考文献

- 秋池 武 1997「初鳥屋遺跡」『横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡』山武考古学研究所
- 秋山浩三ほか 1990「長岡京跡第193次（7AN19F地区）～西辺官衙、南山遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』29（財向日市埋蔵文化財センター）
- 秋山浩三 1991「縄文時代石刀の変遷 - 京都府瑞穂町中台遺跡の採集例をめぐって -」『京都考古』62
- 秋山浩三 1999「近畿における弥生化の具体像」『論争吉備』
- 浅岡俊夫ほか 2000『口酒井遺跡 - 第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要 -』伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会
- 泉 拓良・花谷 浩 1984「和歌山県瀬戸遺跡の第4・5次発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良 1985「Ⅱ縄文時代 5 縄文人のマツリとその終焉」『図説発掘が語る日本史』4 近畿編 新人物往来社
- 泉 拓良・森本 晋ほか 1985『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ - 北白川追分町遺跡の調査 -』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉本知秀・佐久間貴士ほか 1980『土師の里遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会

- 伊勢田進 1966 「南紀白浜瀬戸臨海出土の石棒」『田辺文化財』10
- 岩崎正夫 1955 「徳島市眉山の藍閃片岩類 (第1報)」『徳島大学学芸紀要 自然科学』6
- 岩崎正夫ほか 1970 「眉山・城山の地質」『総合学術調査報告 徳島』郷土研究発表会紀要 15 阿波学会・徳島県立図書館
- 岩崎正夫編 1979 『徳島の自然 地質 1』徳島市民双書 13
- 植田法彦ほか 1975 『和歌山県下津町下遺跡発掘調査概要』下津町教育委員会
- 遠藤順昭 1986 「田中元清水遺跡」『昭和 58 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 大北和美 1997 「土井遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』8 1996 年度 (財徳島県埋蔵文化財センター)
- 大下 明 1988 「第4章第8節 2 石器・石製品について」『伊丹市口酒井遺跡 ー第11次発掘調査報告書ー』伊丹市教育委員会・(財)古代学協会
- 大下 明 1995 「近畿地方の石棒」『飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎をさぐる』岐阜県宮川村教育委員会
- 大野 薫 1981 『丹比柴籬宮跡発掘調査概要 I』大阪府教育委員会
- 岡崎正雄・深井明比古ほか 1985 『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書 30 兵庫県教育委員会
- 勝浦康守 1990 『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会
- 勝浦康守 1995 『第15回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る 最近の発掘調査と徳島の縄文貝塚』徳島市教育委員会
- 勝浦康守・木村早苗 1997 『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 勝浦康守 2000 「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器 ー三谷遺跡・名東遺跡資料の検討ー」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 加藤 修・丹羽佑一・吉川義彦ほか 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- 亀島重則 1999 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅷ』大阪府教育委員会
- 北野俊明 1985 「浜寺船尾西遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』21 堺市教育委員会
- 葛原秀雄ほか 1986 『今津町文化財調査報告書』5 今津町教育委員会
- 口野博史・井尻 格 1993 「戎町遺跡 (第6次調査)」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 栗林誠治 1998 「大柿遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』9 1997 年度 (財徳島県埋蔵文化財センター)
- 栗林誠治 2000 「大柿遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』11 1999 年度 (財徳島県埋蔵文化財センター)
- 合田幸美・松山聡ほか 1992 『小阪遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究」上・下『考古学研究』33 - 3・4号
- 後藤信祐 1999 「遺物研究 石棒・石剣・石刀」『縄文時代』10
- 小林行雄 1959 「せきーぼう」『図解考古学辞典』東京創元社
- 佐藤由紀男 1999 『縄文弥生移行期の土器と石器』雄山閣
- 澁谷昌彦 1995 「石棒研究史と今後の問題点」『飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎をさぐる』岐阜県宮川村教育委員会
- 新村 出編 1991 『広辞苑第4版』岩波書店 (初版 1955)
- 末永雅雄ほか 1961 『檀原』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 17 奈良県教育委員会
- 菅本宏明・石島三和ほか 1999 『北青木遺跡発掘調査報告書 ー第3次調査ー』神戸市教育委員会
- 鈴木陽一ほか 1985 「三軒屋遺跡の調査」『昭和59年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅴ』泉佐野市教育委員会
- 鈴木陽一 1993 「泉佐野市出土の石棒について」『茅渟の道』2
- 多田 仁ほか 1994 『道後今市遺跡X』愛媛県埋蔵文化財調査報告書 53 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

## 第Ⅱ部 研究編

- 田中清美ほか 1982 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(財)大阪市文化財協会
- 丹治康明・池野素子 1986 「宇治川南遺跡」『昭和 58 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 丹治康明 1991 『雲井遺跡第 1 次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 千葉 豊 1992 「北白川追分町遺跡の石棒」『京都大学埋蔵文化財ニュース』2
- 徳島毎日新聞 1925 年 1 月 17 日記事「アイヌ遺跡より又々大石棒を発見す」
- 中井 均・中川和哉ほか 1986 『磯山城遺跡』米原町埋蔵文化財調査報告書 4 米原町教育委員会
- 中川衷三編 1981 『徳島の自然 地質 2』徳島市民双書 15
- 仲川 靖ほか 1994 『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会
- 中山俊紀・安川豊史ほか 1981 『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書 10 津山市教育委員会
- 中村 豊 1998 「稲作のはじまり ―吉野川下流域を中心に―」『川と人間 ―吉野川流域史―』溪水社
- 中村 豊 2000a 「東四国における弥生文化の成立」『第 47 回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立 ―各地域における弥生文化成立期の具体像―』埋蔵文化財研究会
- 中村 豊 2000b 「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 中村 豊 2000c 「四国地域(徳島県・香川県・愛媛県・高知県)の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具 1』平成 11 年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 A (1)『日本人および日本人の起源に関する学際的研究』考古学資料集 12
- 中村 豊 2000d 「近畿・東部瀬戸内地域における結晶片岩製石棒の生産と流通」『縄文・弥生移行期の石製呪術具 1』平成 11 年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 A (1)『日本人および日本人の起源に関する学際的研究』考古学資料集 12
- 新津 健ほか 1989 『金生遺跡Ⅱ(縄文時代編)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 41 山梨県教育委員会
- 畑 暢子・石神幸子・山口誠治 1992a 「縄文時代遺構別・包含層別遺物 久宝寺遺跡(北地区)」『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』(財)大阪文化財センター
- 畑 暢子・石神幸子・山口誠治 1992b 「縄文時代遺構別・包含層別遺物 城山遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』(財)大阪文化財センター
- 畑 暢子・石神幸子 1992 「弥生時代前期遺構別・包含層別遺物 亀井遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』(財)大阪文化財センター
- 春成秀爾 1995 「祭りと習俗 ―縄紋的伝統の衰退と農耕儀礼の成立―」『弥生文化の成立 ―大変革の主体は「縄紋人」だった―』角川書店
- 早川正一・和田克明・村松俊康ほか 1981 『岐阜県古城郡宮川村塩屋金清神社遺跡 ―石棒主体の縄文後期文化―』南山大学人類学博物館紀要 3 南山大学人類学博物館
- 林 直樹 1992 「柱状節理利用の石棒製作址 ―岐阜県塩屋金清神社遺跡―」『季刊考古学』41
- 福山俊彰ほか 1997 『横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡』山武考古学研究所
- 前田佳久・内藤俊也ほか 1993 『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 松井敬代・大下 明ほか 1997 『見蔵岡遺跡 その 2』竹野町文化財調査報告書 11 竹野町教育委員会
- 松尾信裕・森 毅ほか 1983 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』(財)大阪市文化財協会
- 松下 彰 1995 『川辺遺跡発掘調査報告書』(財)和歌山県文化財センター
- 松下 勝ほか 1992 『堂田・八反長発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告 108 兵庫県教育委員会
- 真鍋昭文ほか 2000 『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査報告書 84 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 南 博史・大下 明ほか 1988 『伊丹市口酒井遺跡 ―第 11 次発掘調査報告書―』伊丹市教育委員会・(財)古代



学協会

- 南 博史・森下英治ほか 1988 「高倉宮下層遺跡の調査」『平安京左京三条四坊四町』京都文化博物館（仮称）調査研究報告 2（助京都文化財団）
- 宮野淳一・山田隆一 1993 『八尾南遺跡Ⅱ』大阪府文化財調査報告書 44 大阪府教育委員会
- 森井貞雄 1985 『上遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 森 敬介 1926 「徳島市水道三谷濾過池における原始独木舟発見の顛末」上・下『歴史と地理』18 - 1・5
- 森 敬介・小川国太郎 1960 「第 2 章名東郡の歴史 1 先史時代」『名東郡史』
- 安田 滋・須藤 宏・松林宏典 1993 「篠原遺跡」『平成 2 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 山中一郎 1992 「石の動き、土器の動き」『新版古代の日本 5 近畿Ⅰ』角川書店
- 山本 彰 1980 『三軒屋遺跡 - 昭和 54 年度の調査 -』泉佐野市教育委員会
- 山元敏裕ほか 1995 『井手東Ⅱ遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告 27 高松市教育委員会
- 山本雅和ほか 1989 『神戸市須磨区戎町遺跡第 1 次発掘調査概報』神戸市教育委員会
- 羊我山人 1961 「阿波の石棒」『徳島教育』162
- 米田敏幸ほか 1981 『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会

挿図出典

- 図 2 1 新津ほか 1989、2 伊勢田 1966、4 菅本・石島ほか 1999、5 中山・安川ほか 1981、6 鈴木 1993、7 勝浦・木村 1997、9 田中ほか 1982、11 北野 1985
- 図 3 1 前田・内藤ほか 1993、2 勝浦・木村 1997、3 千葉 1992、4 末永ほか 1961、5 大野 1981、7 岡崎・深井ほか 1985、8 松尾・森ほか 1983、9・10 合田・松山ほか 1992、11 多田ほか 1994
- 図 8 1 勝浦 1990、2～4 勝浦・木村 1997、7 前田・内藤ほか 1993
- 図 9 1 勝浦・木村 1997 より作成。
- 図 12 1 中山・安川ほか 1981、2 多田ほか 1994、3 真鍋ほか 2000、4 山元ほか 1995、5～8 栗林 2000
- 図 13 1～3 勝浦 1990、5～10 勝浦・木村 1997
- 図 14 1・3～12 勝浦・木村 1997
- 図 15 1・2 岡崎・深井ほか 1985、3～5 前田・内藤ほか 1993、6 山本ほか 1989、7・8 丹治 1991、9・10 菅本・石島ほか 1999、11・13・14 南・大下ほか 1988、12 浅岡ほか 2000
- 図 16 2・4 畑・石神 1992、3 畑・石神・山口 1992b、8・12 田中ほか 1982、9～11・13～16 松尾・森ほか 1983、18 宮野・山田 1993
- 図 17 1 大野 1981、2 北野 1985、3・5 合田・松山ほか 1992、4 鈴木 1993、6 南・森下ほか 1988、7 千葉 1992、8 末永ほか 1961
- 図 18 1～3 松下 1995、4 伊勢田 1966、5 仲川ほか 1994

以上すべて再トレースをおこなった。上記の他はすべて中村実測・トレース・製図。

写真図版 すべて中村撮影。写真 8 の戎町遺跡出土石棒は神戸市教育委員会所蔵。

表3 縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭結晶片岩製石棒一覽

番号	県名	遺跡名	出土点数	時期	備考	文献
1	岡山	津島岡大	1	弥生前期初頭		岡山大学埋蔵文化財センター調査
2	岡山	門田	1	弥生前期		中山・安川ほか 1981
3	高知	田村	1	弥生前期初頭		高知県埋蔵文化財センター調査
4	愛媛	道後今市	1	滋賀里IV～船橋併行		多田ほか 1994
5	愛媛	阿方	1	晩期末		真鍋 2000
6	香川	井手東Ⅱ	1	晩期末～前期		山元ほか 1995
7	徳島	大柿	6	船橋併行		栗林 1998、2000
8	徳島	土井	1	滋賀里IV併行		大北 1997
9	徳島	名東	4	長原	未製品	勝浦 1990
10	徳島	三谷	20	長原～前期	未製品。2点は戦前出土、散逸。	森敬 1926、勝浦・木村 1997
11	兵庫	丁・柳ヶ瀬	3	晩期末～前期		岡崎・深井ほか 1985
12	兵庫	戎町	3	晩期末～前期	紅簾片岩 1	山本雅ほか 1989、口野・井尻 1993
13	兵庫	大開	12	前期初頭	紅簾片岩 1	前田・内藤ほか 1993
14	兵庫	宇治川南	1	晩期末		丹治・池野 1986
15	兵庫	雲井	2	長原～前期		丹治 1991
16	兵庫	田中元清水	1	晩期末		遠藤 1986
17	兵庫	北青木	5	長原～前期		菅本・石島 1999
18	兵庫	本山	1	前期初頭		神戸市教育委員会調査
19	兵庫	口酒井	16	長原		南・大下ほか 1988、浅岡ほか 2000
20	大阪	東奈良	1	長原～前期		茨木市立文化財資料館所蔵
21	大阪	久宝寺北	4	長原	小片	畑・石神・山口 1992a
22	大阪	亀井	2	弥生前期		畑・石神・山口 1992b
23	大阪	城山	2	晩期末～前期		畑・石神 1992
24	大阪	長原	22	長原		田中ほか 1982、松尾・森毅ほか 1983
25	大阪	田井中	4	長原～前期		亀島 1999
26	大阪	八尾南	2	長原	紅簾片岩 1	米田ほか 1981、宮野・山田 1993
27	大阪	丹比柴籬宮跡	1	長原	石材不明	大野 1981
28	大阪	土師の里	1	長原	石材不明	泉本ほか 1980
29	大阪	船尾西	1	長原		北野 1985
30	大阪	上	1	晩期末		森井 1985
31	大阪	小阪	2	長原～前期		合田・松山ほか 1992
32	大阪	三軒屋	2	晩期末		山本彰 1980、鈴木ほか 1985、鈴木 1993
33	和歌山	川辺	3	晩期末?	晩期前半～末	松下彰 1995
34	和歌山	下	2	滋賀里IV	唯一の小型例	植田ほか 1975
35	和歌山	堅田	3	弥生前期		御坊市教育委員会調査
36	和歌山	徳蔵	5	長原		和歌山県文化財センター調査
37	和歌山	瀬戸	1	長原～前期		伊勢田 1966、泉・花谷 1984
38	奈良	池田	2	晩期		大和高田市教育委員会調査
39	奈良	檀原	2	晩期末		末永ほか 1961
40	京都	高倉宮下層	2	晩期末		南・森下ほか 1988
41	京都	北白川追分町	2	晩期末?	縄文中期末～晩期末	泉・森本ほか 1985、千葉 1991
42	滋賀	滋賀里	2	晩期末		加藤・丹羽・吉川ほか 1973
43	滋賀	穴太	1	晩期末		仲川ほか 1994
44	滋賀	上出A	2	晩期末?	中期末の土器も出土	滋賀県埋蔵文化財センター調査
45	滋賀	北仰西海道	2	晩期末		葛原ほか 1986
46	滋賀	磯山城	1	晩期末?	縄文早期～晩期末、紅簾片岩	中井・中川ほか 1986
合計			156			

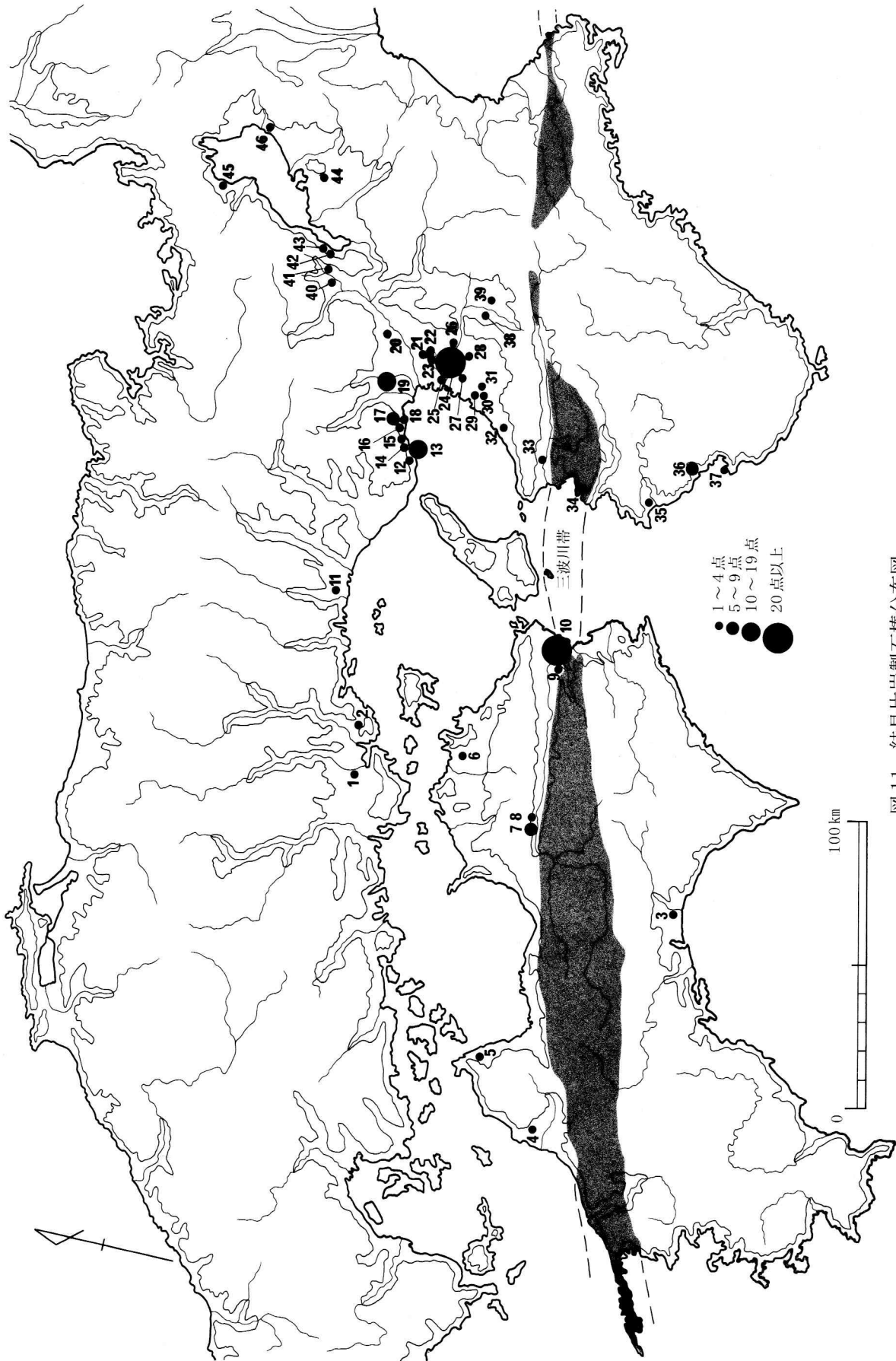


図11 結晶片岩製石棒分布図

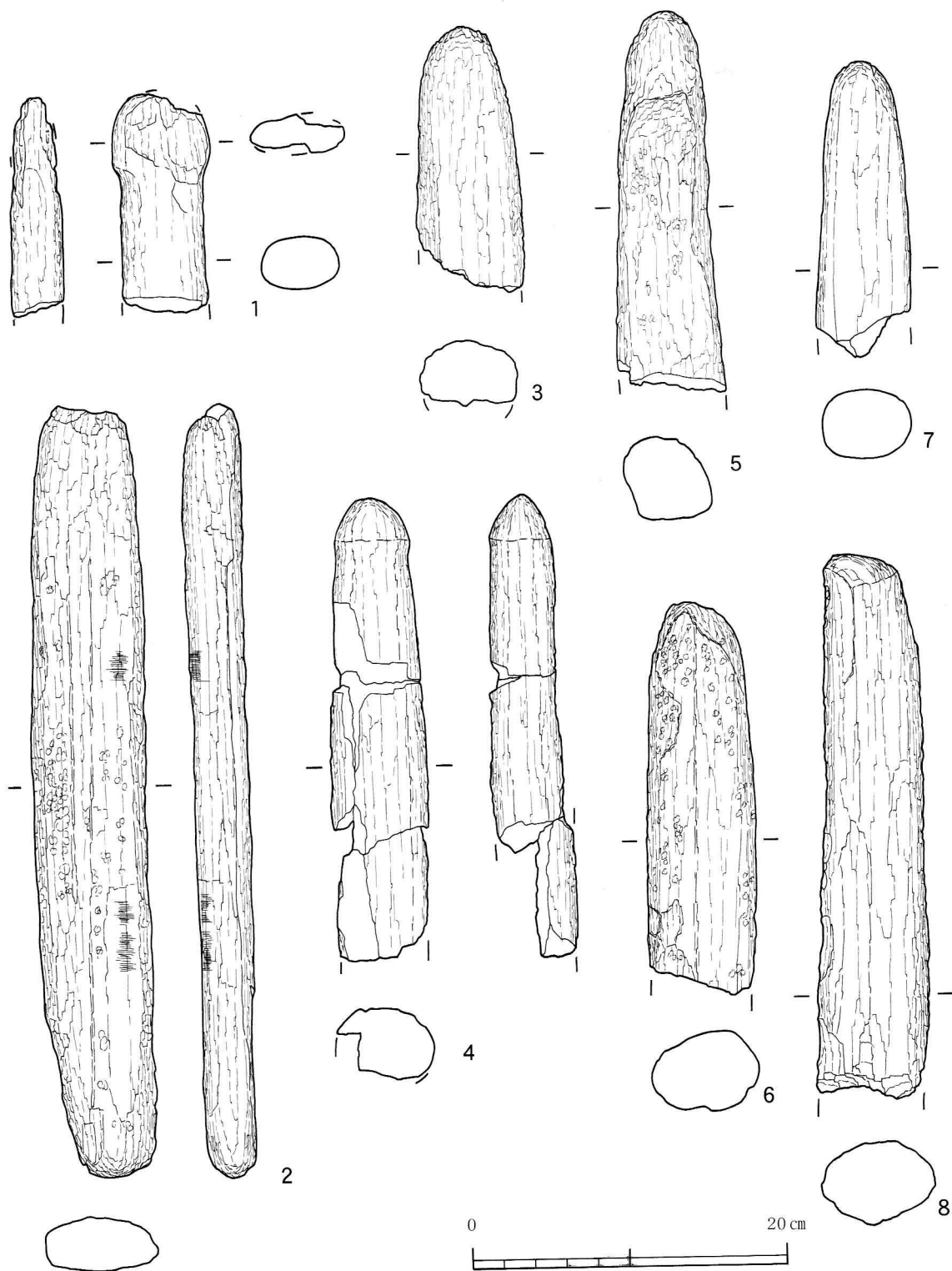


図12 集成図 (1/4)

(1 門田、2 道後今市、3 阿方、4 井手東Ⅱ、5~8 大柿)

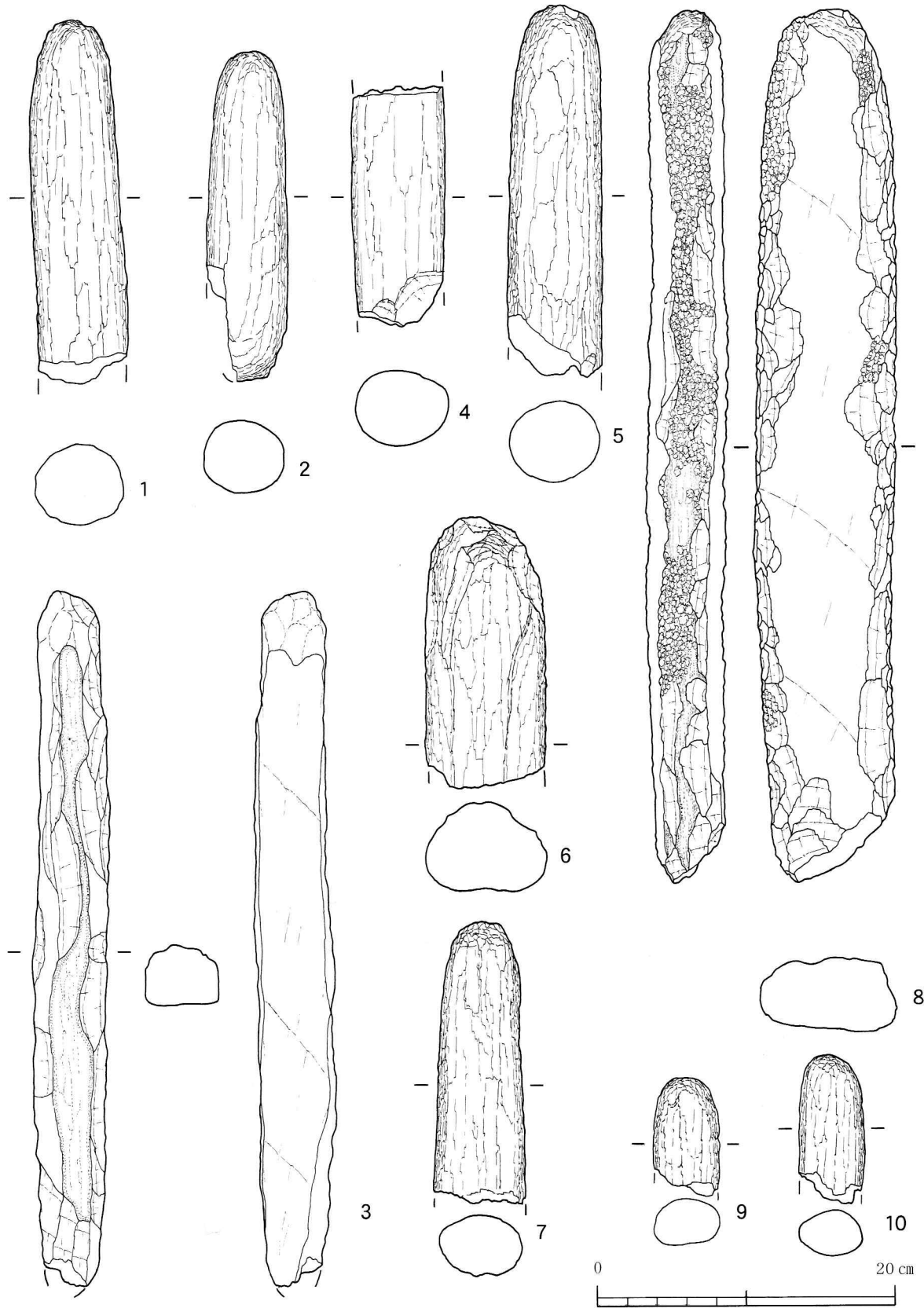


図13 集成図2 (1/4)

(1~4 名東、5~10 三谷)

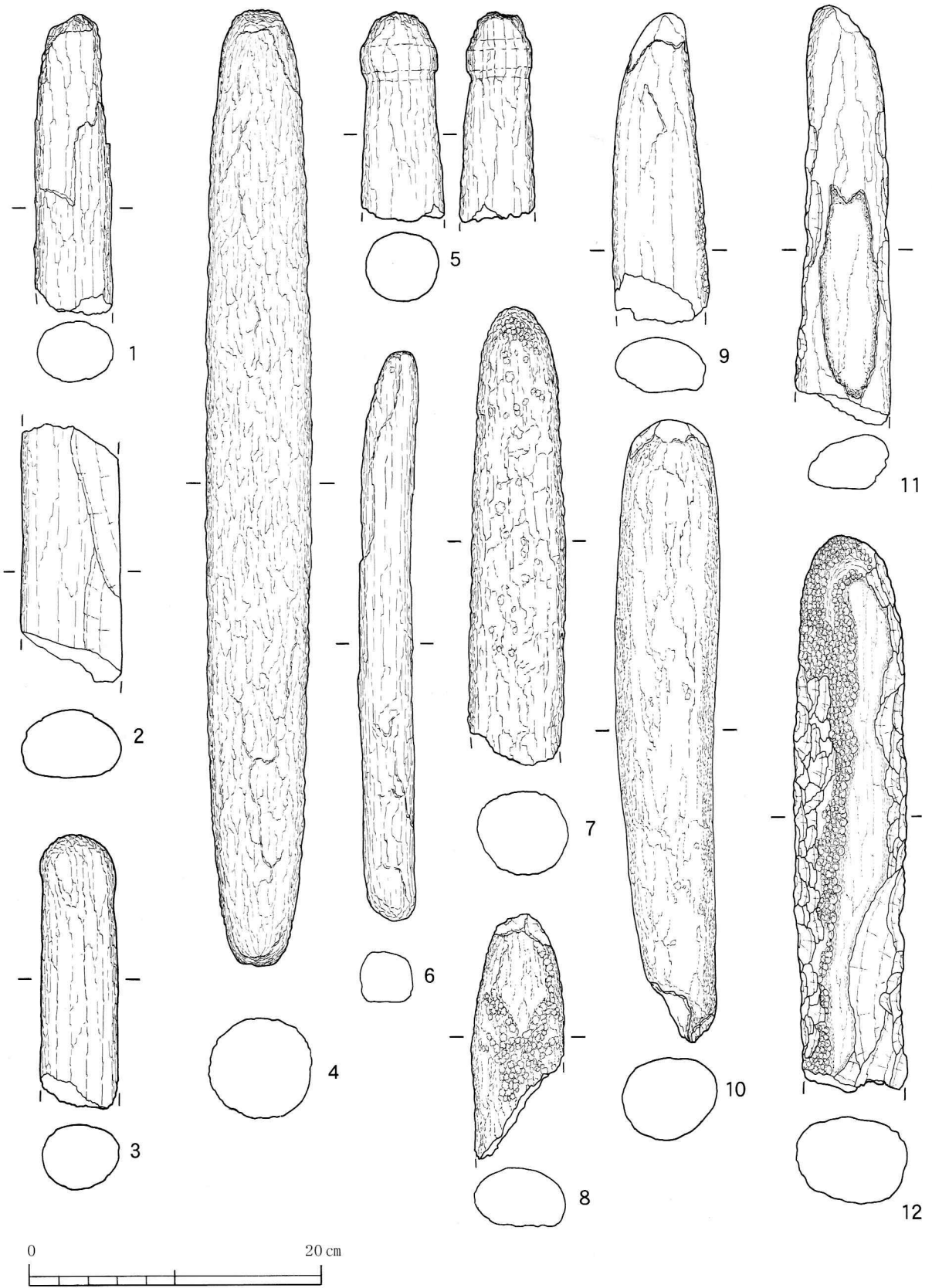


图14 集成图3 (1/4)

(三谷)

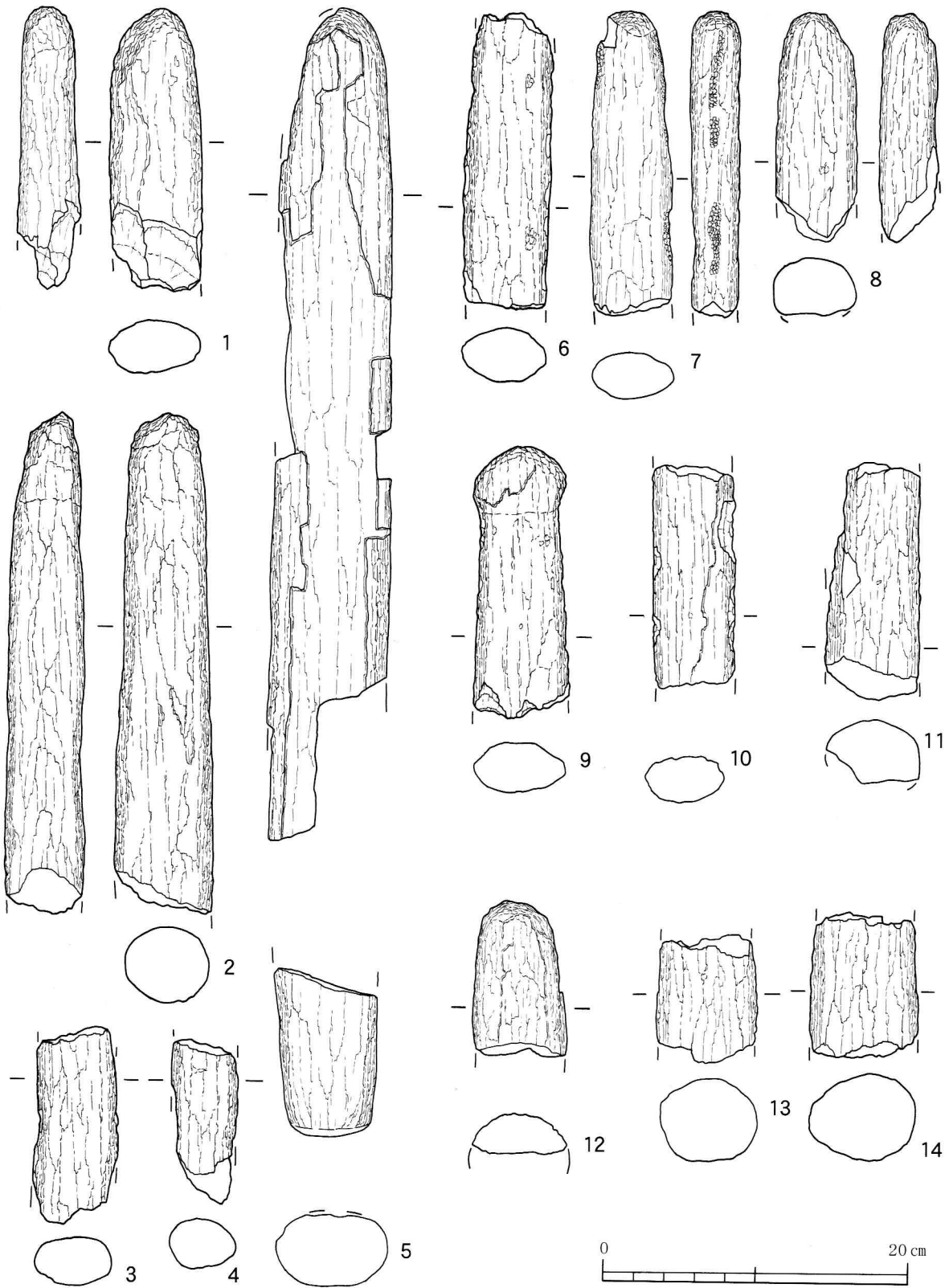


図15 集成図4 (1/4)

(1・2 丁・柳ヶ瀬、3～5 大開、6 戎町、7・8 雲井、9・10 北青木、11～14 口酒井)

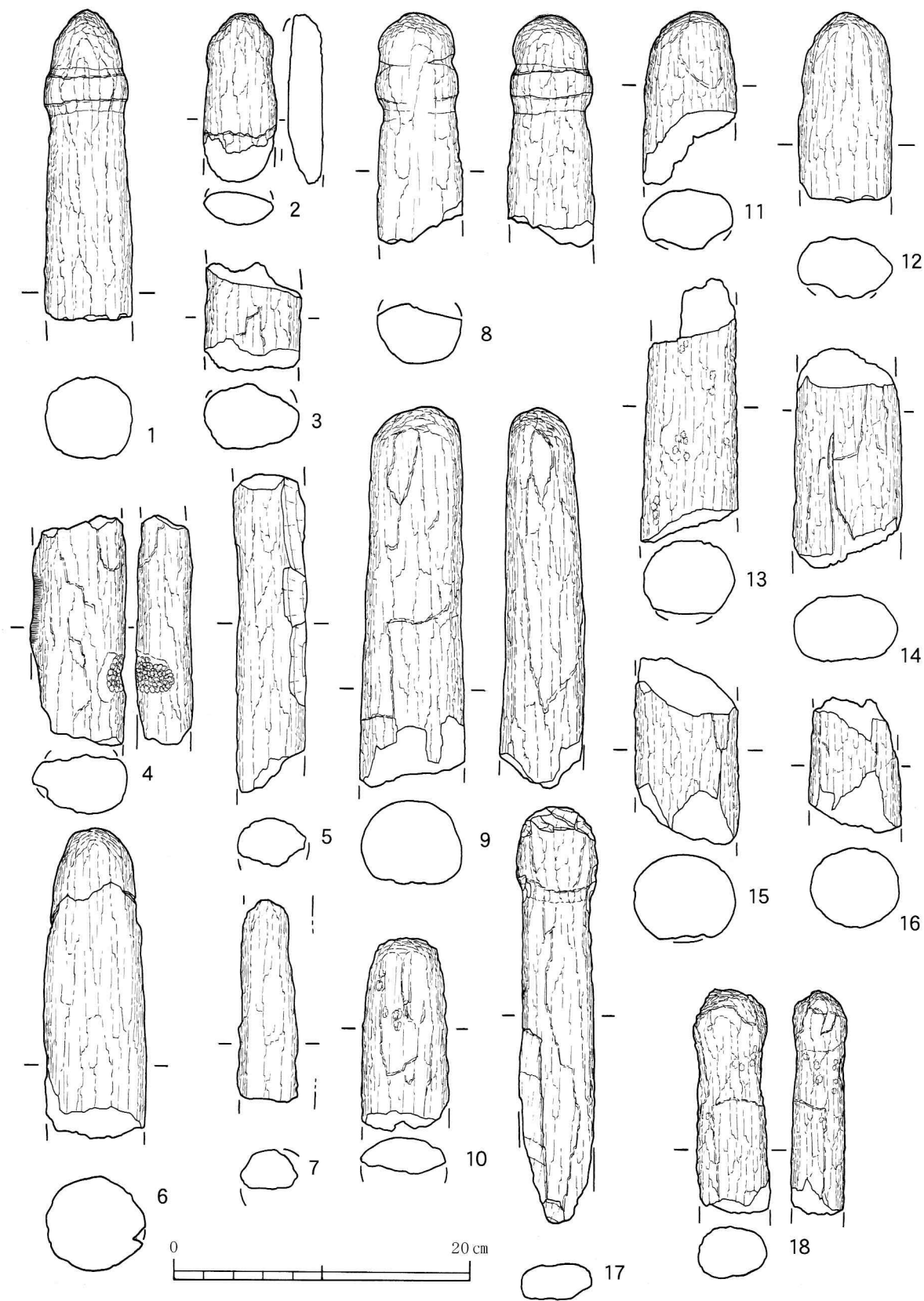


図16 集成図5 (1/4)

(1 東奈良、2・4 亀井、3 城山、5~7 田井中、8~16 長原、17・18 八尾南)



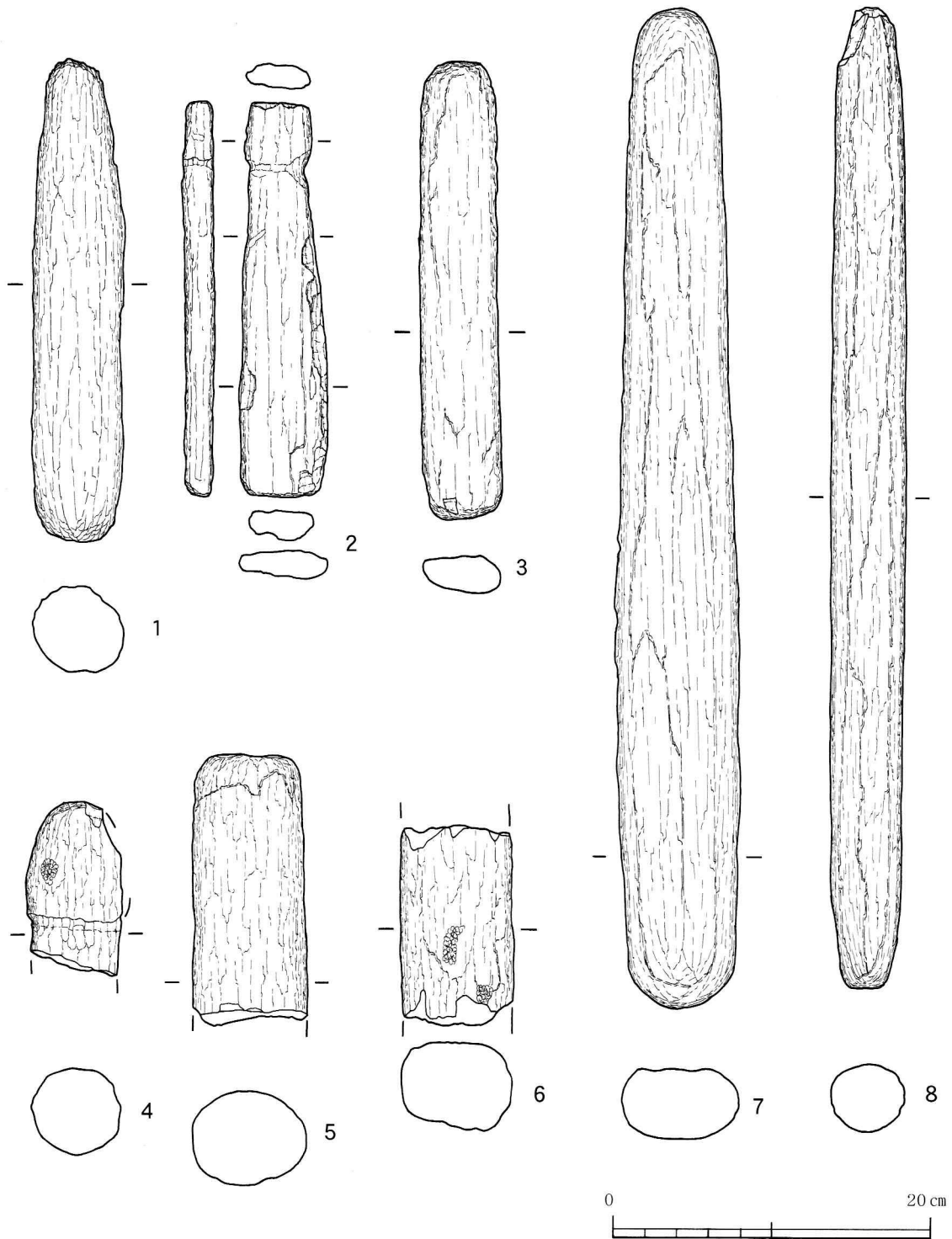


図17 集成図6 (1/4)

(1 丹比柴籬宮跡、2、船尾西、3・5 小阪、4 三軒屋、6 高倉宮下層、7 北白川追分町、8 樞原)

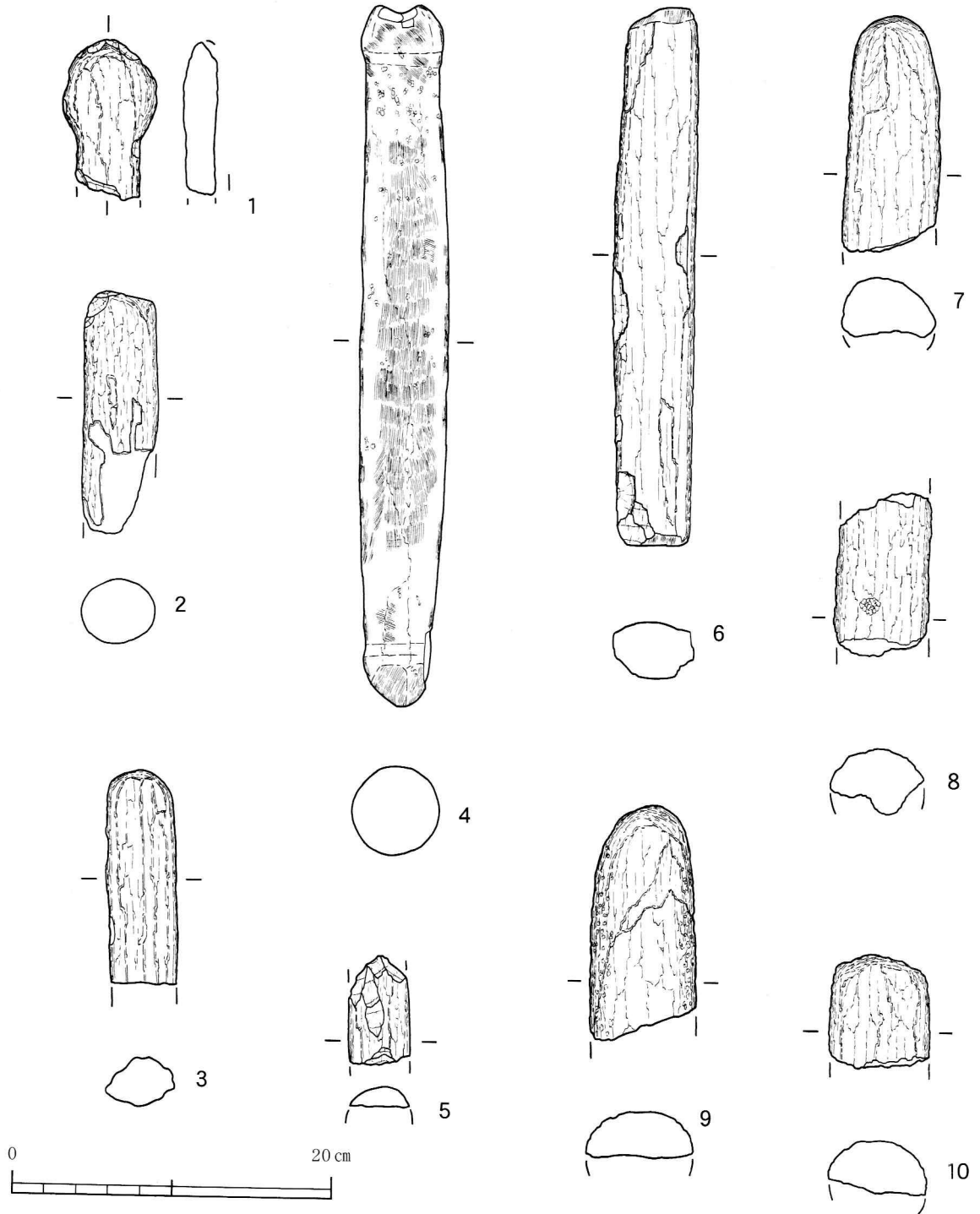


図18 集成図7 (1/4)

(1~3 川辺、4 瀬戸、5 穴太、6 磯山城、7・8 北仰西海道、9・10 滋賀里)

# 写真図版





写真1 眉山遠景 北より



写真2 眉山北麓（蛇谷）の結晶片岩転石



写真3 三谷遺跡付近紅簾片岩 露頭 (地点A)



写真4 三谷遺跡付近紅簾片岩 転石 (地点a)



写真5 名東遺跡付近の紅簾片岩 露頭 (地点B)



写真6 地点 B 採集 紅簾片岩



写真7 地点 A 採集 紅簾片岩

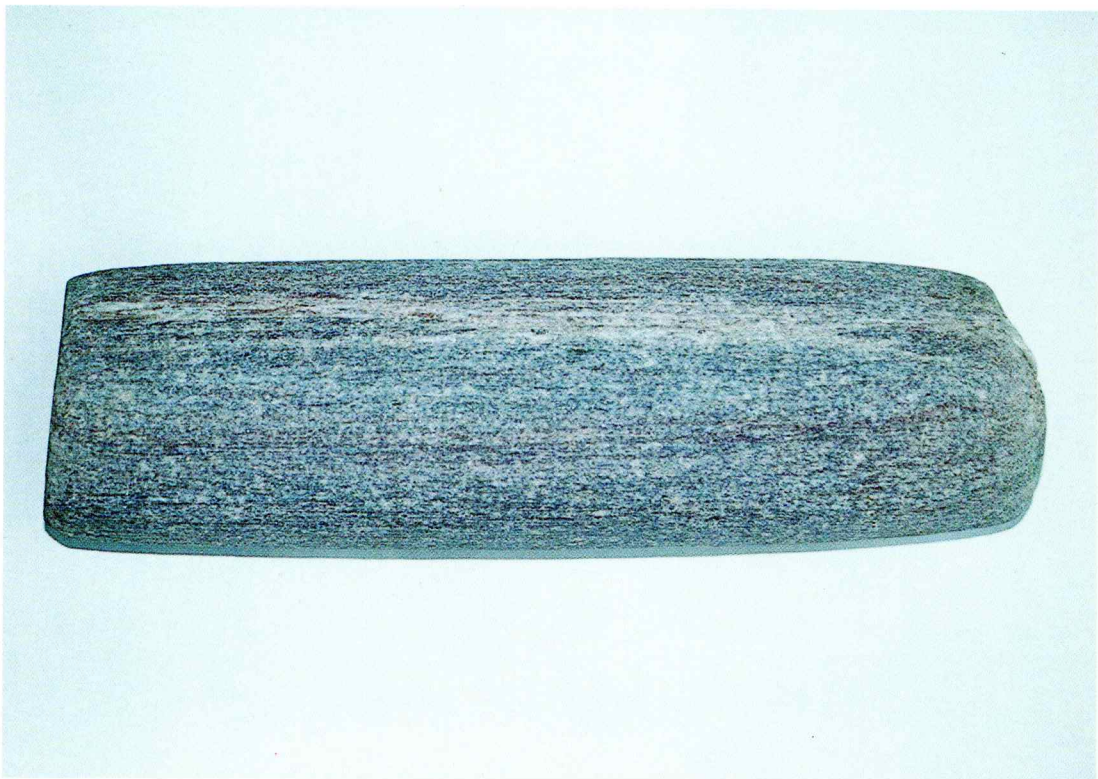


写真8 神戸市戎町遺跡出土紅簾片岩製石棒  
(神戸市教育委員会所蔵)



**縄文・弥生移行期の石製呪術具 3**

考古学資料集 18

平成 12 年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 A (1)

『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』  
考古学研究成果報告書

編 著 中 村 豊 (徳島大学大学開放実践センター)

執 筆 大下 明、寒川朋枝、濱田竜彦

発行日 2001 年 2 月 28 日

発行者 国立歴史民俗博物館 春成秀爾研究室

印 刷 徳島印刷センター

表 紙 三谷遺跡出土結晶片岩製石棒 (1/8)